

戸定会会報

〈千葉大学大学院園芸学研究科・園芸学部〉



CONTENTS

特集

牧野富太郎・川村清一・大井次郎と
植物学教室について 2

特集

我らが第2の故郷、松戸市と園芸学部 4

会長ご挨拶 6

研究院長ご挨拶 6

副会長ご挨拶 7

退任のご挨拶 7

退職のご挨拶 8

新任のご挨拶 10

学科近況 11

支部だより 14

令和6年度 戸定会役員 18

令和6年度 戸定会理事会総会報告 19

会計報告 20

学年幹事紹介 21

飯田格先生を偲んで 21

会員計報 21

令和5年度 学術振興委員会事業報告 22

令和5年度 戸定会寄付者ご芳名 23

令和5年度 卒業・修了生の進路 24

学生の声 26

国際交流 27

卒業生だより 28

同窓生探訪④ 29

ホームカミングデー 30

研究紹介 31

園芸学部あれ！これ！（その9） 32

戸定会より寄付のお願い 32

編集後記 32

2024

ご本人はどこにも書いておられません、昨年のNHK朝ドラ「らんまん」の主人公のモデル・牧野富太郎先生は確かに黎明期の県立千葉園芸専門学校で教鞭を取っておられました。

1954年に発行された「千葉農業専門学校沿革史」の職員録には、牧野富太郎・理博・講師として、明治44年4月から大正3年1月まで勤務されたことが記録されています。千葉県立園芸専門学校の設立2年後採用されたようです。大正3年2月に千葉県立高等園芸学校と本校の名称が変更されますが、その直前に退職されています。

1981年に発行された「千葉大学園芸学部七十年史」の草創期の教授陣容（明治44年）には植物分類学と植物分類学実験の担当として講師・牧野富太郎の名前があります。「沿革史」の研究業績の項目は、「植物学研究室業績」として、「明治42



写真1 印旛沼で調査する牧野富太郎先生と千葉県博物採集会の一員（1940年撮影、千葉県立中央博物館より提供）

年開設以来大正3年に至る間に本格的活動がない」と辛辣です。しかし、本会報表紙に示すノジギクの自筆図のように、園芸に寄与する研究も多数されています。ご自身が故郷高知で発見された本種を、当初、栽培菊の原種と考えられたようです。専門学校退職後も先生は採集をしに頻繁に千葉を訪られていました（写真1）。

牧野先生側の事情では、明治43年3月頃に、先生は助手として勤めていた東京帝国大学理科大学を罷免されています。その後明治45年1月に帝大講師として再採用されるまで、その身分は嘱託でした。園芸学校に勤める事情を牧野先生は書き残していないので、詳しくはわかりませんが、その苦難の期間に、園芸学校の職を得たということのようです。

牧野先生にとって、園芸学校の勤務は重大な意味があったかもしれません。それによって講師という履歴を入れることができるようになったからです。先生は明治30年代の終わり頃から、一般向けの講習会を始められたようですが、高等教育機関における



写真2 植物学講義全八巻（大日本博物学会、1913～1914年刊）

講義は、園芸学校が初めてだったと思われます。

千葉大学の蔵書に大正2年から3年にかけて刊行された「牧野富太郎著 植物学講義」があります（写真2）。

著者欄には東京帝国大学講師とありますが、少なくとも当初は園芸専門学校講師でもあったはずで、そこで行われた講義内容が伺われます。植物記載学に二巻、植物採集標本製作并整理貯蔵法に一卷、羊歯及種子植物ノ形態に二巻、植物自然分科検索表に一卷、植物分類学に二巻が割り当てられています。植物の収集と記載が重視されているところが、牧野先生らしいところでしょうか。

牧野先生に代わって、大正3年4月に赴任されたのが川村清一先生で、終戦直後まで植物学研究室を主宰されました。「沿革史」も川村先生の研究には好意的で、植物学研究室業績として、「特に軟質菌蕈に関する数多の業績をのこし本邦第一人者の名声を壇にした」と記しています。

牧野先生は画才と企画力・交際力があり、日本独特の植物図鑑文化に多大な貢献をされましたが、川村先生もまたわが国キノコ図鑑の創始者です。先生は、帝室山林局勤務時代に「日本菌類図譜」を出版していましたが、千葉高等園芸赴任後の1930年に244種の図版を備えた「原色版日本菌類図説」を出版されました。それらの図のほとんどは先生自ら描いたものです（写真3）。

写真で抱かれているオニフスベも、ラテン語による記載がないものの、欧米の近縁種とは異なるとして、川村先生が1973年に *Calvatia nipponica* Kawam. を新種提案したものです（写真4）。

先生はさらに多くの図を備えた図鑑を計画されていましたが、1945年5月の空襲で出版間近の製版と紙型が焼失してしまい、ご本人も翌年亡くなられました。牧野日本植物図鑑のキノコ図版を川村先生に頼っていた牧野先生は、「キノコの川村博士逝く」と「植物一日一題」に書いていま



写真3 原色版日本菌類図説（大地書院、1929年刊）のキノガサタケの解説文と図



写真4 オニフスベを抱く川村清一先生（保育社「続原色日本菌類図鑑」より写す）

三郎と植物学教室について

前千葉大学付属図書館松戸分館長

小林 達 明

す。しかし、遺族の手元に残された原図と校正刷りをもとに、433種832の図版を備えた「原色日本菌類図鑑」全8巻が川村清一著として1953～55年に刊行されました。

先生の研究のもう一つユニークなところは毒菌の研究です。「食菌と毒菌」という著書もありますが、上記図説・図鑑中にもキノコによる中毒症状が多く記述されており、現代のキノコ図鑑の記述の多くも先生の著作に頼っているようです。

なお、先生は岡山県津山の出身ですが、川村家は多くの学者・芸術家を輩出しており、園芸学部教授だった福田泰二先生は甥、柏市こんぶくろ池公園のアドバイザーで私がずっと一緒にいる東京大学農学部の福田健二教授は姪孫にあたります。

牧野先生が日本植物誌をまとめたかったことはドラマでも描かれていましたが、結局達成されませんでした。その夢は、国立科学博物館の大井次三郎博士によって1953年達成されましたが、大井博士は何の因果か、高等園芸1927年の卒業生です。

「極めて詳細正確な図を伴う植物誌」という牧野先生の熱意を大井先生は受け継がれたのでしょうか。どうもそういうわけではなさそうです。その事情については、京都帝大植物学教室で同僚だった京都大学名誉教授・北村四郎博士が雑誌・植物分類地理に掲載された追悼文に詳しく書かれているので抜粋引用します。

大井さんは高等園芸卒業後、京都帝大農学部に入學したが、分類学志望だったため、理学部植物学教室の小泉源一教授に指導を受けた。（一学年後輩の北村さんは）多数の新種と新属を含む大井さんの研究ノートを見せられ「肝をつぶした」。大井さんが3年生の時、論文 *Symbolae ad Floram Asiae Orientalis* を植物学雑誌に投稿し、その後ずっと使われる J. Ohwi の名前で新種11種を記載した。

その頃、大井さんは北村さんに提案した。「松村任三博士の帝国植物名鑑が出てからあと、多くの植物分類の研究がでて、これをさがすのに大変時間がかかる。各種について、文献を整理したものを作ろうではないか。君と分担して作ろう。できたらお互いに写しあうのだ。ついては用紙を印刷しよう」。北村さんは賛成して、特別の線を入れた原稿用紙を注文した。

この計画について小泉教授に相談したが、教授からは、「学名の整理は分類学に熟達した人がやることだ」と言われた。小泉先生の師である北大の宮部金吾教授は、「京都大学では GRAY's Manual のような（検索表を伴った簡明な植物誌）を作ってほしい」と言われていた。大井さんは1942年までにスゲ科とイネ科の検索表ができていた。

大井先生は、1936年から京都帝大理学部講師を務め、内蒙古学術探検など多くの海外調査に参加された後、陸軍司政官の肩書きで、初島住彦氏の招きでボゴール植物園腊葉館に勤務。戦後復員し、佐竹義輔氏、奥山春季氏（高等園芸OB）の招きで東京科学博物館へ。昭和24年5月から同図書課長。その立場で1953年「日本植物誌・顕花篇」、1957年「同・シダ

篇」を出版。出版社は、大井氏の奥様、田鶴子さんの実家・至文堂でした。さらに1965年米国スミソニアン協会から *Flora of Japan* 英語版が世界に向けて出版されました（写真5）。

執筆の様子は、今年亡くなられた元ニューヨーク市立大学教授・小山鐵夫氏の追悼文から引用します。

「当時国立科学博物館の図書課長であられた大井先生は、上野の旧館の薄暗い図書室の片隅で、図書課の面倒な雑務の一寸した間にも、本当に寸暇を惜んで—というより、私には、好きな植物が見られる、という大井先生の僅かなる憩の時であつたと思うが—便箋の裏にせつせと筆を運んで居られたものが「日本植物誌」初版の原稿であつたのだ。研究室ではない図書課の小さな事務机だから、標本も少数しか持ち込めず、参考書を広げるにもスペースがなく、まして解剖顕微鏡もないので、先生の強い近視の眼鏡の奥に円い眼を見にくそうに開かれて、標本を見つめておられ、手にしたルーペに時々眼鏡のガラスが当って音を立てていた。図書課の事務が本業の当時の先生にとっては、研究は副ということなのだろうか、こんな不便な御研究も自由にとは行かなかったのである。こ



写真6 国立科学博物館図書室の大井次三郎先生（1958年田中肇氏撮影）

の様な書くのも残酷感を覚える恵まれない環境下で、一人の手助けもなく、独力で完成されたのが「日本植物誌」である。」（写真6）。

写真6は、ちょうど日本植物誌二篇を刊行された頃1958年に、田中肇氏（花生態学者）の求めに応じて、科博図書室で撮影されたものです。若きナチュラリストの求めに少し戸惑いながらも、知性と慈愛に溢れた表情の先生の様子が伺えます。

こうした物語を秘めた植物学研究室でしたが、新制・千葉大学には引き継がれませんでした。文理学部との関係かとも推察しますが、惜しいことでした。

大学図書館松戸分館では、牧野先生・川村先生の図書を年末まで企画展示しておりますので、松戸にお寄りの際は覗いてみてください。



写真5 *Flora of Japan* (Smithsonian Institution, 1965) の扉ページ見開き

市制80年を迎えた松戸市

松戸市は園芸学部卒業生にとりましては第2の故郷だと思います。松戸市は2023年に市制80周年を迎え、2024年6月7日に人口が50万人に到達しました。皆様方には松戸市にそれぞれの思い出があると思います。歴史を振り返りますと松戸市は市の前身であります松戸町が誕生した明治22年（1889年）の人口は6,050名との統計があります。正岡子規は同年に、千住から人力車に乗り、江戸川を渡り、当時の東漸寺近辺の模様を小金の地名を読み込んだ「犬の子がねいるものかや子守歌」と詠いました。松戸町はその後、昭和18年（1943年）に人口4万人の千葉県7番目の市として誕生しました。母校は明治42年（1909年）千葉県立園芸専門学校として設立され、昭和4年（1929年）に文部省に移管され、全国唯一の官立の高等園芸学校となり、昭和24年（1949年）に国立学校設置法により、新制大学として千葉大学園芸学部となりました。現在、戸定会の会員数はのべ約2万人を超えておりますが、松戸には皆様方のそれぞれの思い出に満たされていると思います。会員からの手紙で語られた講堂前（現在はA棟と呼ばれ造園系の研究室）の2m程度だったと書かれたヒマラヤスギは、現在、天をつく巨木となっております。



写真1：大正4年に落成した講堂

また、思い出として語られる松戸市内の春雨橋の近くの菓子屋「岡松」、蕎麦屋「関宿」は現在も営業を続けております。

昭和12年（1937年）版の戸定会会報には「校風の源泉は寮にあり、心身の修行の道場であり、家庭に代わる安息所」と語られた浩気寮は建て替えられ、現在は女性の寮生もおります。現在、園芸学部の



写真2：A棟脇のヒマラヤスギ

女子学生は半数を超えており、今や成績優秀者表彰を受ける学生の多くは女子学生です。戸定祭の実行委員会も女性が主導している印象を持ちました。卒業式の綺麗に着飾った女性の華やかさは、女性には少なかった私の在学していた時代（1971年卒）には、想像もつかない状況です。



写真3：戸定会会報（昭和12年6月発行）



写真4：現在の浩気寮写真 定員 男子42名 女子20名

私は千葉大学剣道部に属していましたが、松戸にはかつて北辰一刀流を創設した剣豪千葉周作が修行を積んだ浅利道場があり、「千葉周作修行の地」の標柱もあります。

松戸駅から園芸学部に向かう途中の左手に相模台があり、東京工芸専門学校が大正10年（1921年）に設立されました。その後、新制国立大学は原則1県1校と決定されたことで、千葉大学の傘下に入るようになりました。相模台には「千葉大学工学部跡」の記念碑があります。

園芸学部には日本最古と云われるイタリア式庭園、日比谷公園、新宿御苑他に次ぐ4番目に古いフランス式



写真5：工学部跡記念碑

庭園など洋風庭園があり、周辺には100年以上管理されてきた樹林が広がっています。



写真 6-1：フランス式庭園（昭和4年ごろ）



写真 6-2：100周年記念で整備されたフランス式庭園



写真 7：100周年記念で整備されたイタリア式庭園

皇室とのゆかりも深く、皇太子時代の大正天皇、昭和天皇、現在の上皇陛下がそれぞれ1回母校を行啓されております。さらに平成21年（2009年）10月には、当時の天皇后陛下が行幸啓されました。

与謝野晶子は千葉県立園芸学校を再三訪ずれ、「松戸の丘」と題して短歌59首を詠み、旧講堂前には歌碑が建てられています。



写真 8：大正15年皇太子時代の昭和天皇行啓

また、俳優の山崎努は松戸市出身で子供のころ千葉高等園芸学校を訪れ、「職業柄、国内外のたくさんの風景を見たが、あの高台が天国のように最も美しかった。」と述べております。（京成らいん632号）



写真 9：与謝野晶子歌碑

園芸学部の特異性と現状

他大学は農学部と称し、米麦中心の教育・研究をするなか、園芸学部は世界的にもまれなる園芸を名乗る学部です。私がかつて務めておりましたJA全農の販売事業では、これまで米穀事業が最大でしたが、園芸事業が米穀農産事業の約2倍の取り扱い分量となっております。神奈川県横浜市では2027年に、1990年の大阪花の万博以来37年ぶりとなる国際園芸博覧会が計画されております。この機会に“園芸学部”のユニークさを世に問う時代が来たように思います。

千葉大学園芸学部大学院の定員は博士前期課程：環境園芸学専攻108名だったものが、国際環境学コースの設置によって、20人増えて128名になり、博士後期課程：環境園芸学専攻18名だったものが14人増えて32名に増員されました。園芸学研究院が評価された証しでもあります。また、宇宙園芸研究センターの概算要求が認められ、2024年度は教員の博士後期課程定員2名増（定員増は全国7大学のみ）となりました。宇宙園芸研究センターが業績を出していけば、4年間2名ずつ増が認められる可能性があります。全国の大学の定員削減の中で評価された証しでもあります。また組織改革と共に、予算も2024年度は3,000万円規模の予算増が認められました。

ますますの母校の発展を期待していきたいと思っております。

学生にとっても卒業生にとっても 身近な存在の戸定会に！

戸定会会長 齋藤京子

戸定会会員の皆様には、ご健勝にて各方面でご活躍のこととお慶び申し上げます。

令和6年6月の戸定会総会で会長に就任しました齋藤京子です。私は、昭和51年3月に園芸学科を卒業し、農林水産省に入省後は農村女性対策、消費安全対策など様々な仕事に関わり、退職後は各種ボランティア活動などをしております。

平成30年6月に副会長に就任し6年間、多くの戸定会活動に関わりました。このような戸定会活動ができるのも、園芸学研究院・園芸学部の方の温かいご理解とご尽力があってのことと感謝しております。また、戸定会事務局員が日頃から堅実に心を込めて事務局対応をして下さるおかげです。6年間の経験を踏まえ、戸定会活動の方向性を戸定会のTにかけて、「3つのT」に向け取り組んでいきたいと思います。

①学生からT：頼りになる「戸定会」

②会員同士がT：楽しく繋がる「戸定会」

③千葉大学園芸学部の発展にT：携わり応援できる「戸定会」

①では、在校生の就職支援・就業継続支援に社会の先輩として戸定会員の生きた就職情報や働き続けるためのノウハウを伝えたり、学生の研究助成金の支援などで頼りになりたいと思っています。

②では、全国の支部の活動が楽しく意義のあるものとして、若い方から大先輩までの戸定会員に参画してほしいと思っています。もちろん女性会員の支部役員や支部活動への参画も増やしていきたいです。また、円滑に支部活動が行えるよう必要な手段を講じたり情報を共有したいと思っています。

③では、全国唯一の国立大学の園芸学部の発展に資するよう、必要に応じ寄付活動などを進めたいと思っています。

戸定会は、1916年（大正5年）に卒業生及び在学生相互の親睦を図り、併せて社会に貢献することを目的に設立されました。現在では2万名を超える会員を擁する同窓会として発展してきています。

加藤前会長が戸定会に寄付文化が根付いてきたと日頃から話されていますが、会員の皆様の戸定会に寄せる温かい心が、活動の大きな支えとなっています。令和6年4月には新たに220名の入会者をお迎えしました。戸定会は、入学時に一度会費を納めれば永久会員として生涯にわたり、会報の他人生や仕事に有意義な様々な関わりが持てます。その上で、この豊かな活動の流れを将来にわたり続けることができるよう、戸定会へのご寄付を引き続きお願いいたします。2万円以上の方には、沼田農場のリンゴなどの返礼品があります。

これからも、引き続き広く皆様のご理解とご支援を得ながら皆様と共に進めていきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

千葉大学園芸学部・大学院園芸学研究科の近況

園芸学研究院長 百原新

4月より松岡延浩先生の後任として園芸学研究院長に就任しました。私は、1994年に緑地・環境学科に赴任し、緑地生態学研究室に所属してちょうど30年になります。しかし、キャンパスを散策して歴史ある庭園や大きく育った木を眺めると、私のすごした時間がキャンパスの歴史の中

ではほんの短い時間にすぎないことを、いつも、感じます。

卒業生の皆様のご援助で設立した、松戸アカデミックリンクセンター（千葉大学附属図書館松戸分館）の3Fからのキャンパスの眺めは素晴らしいものがあります。窓に沿って自習のための机がならんでおりますが、そこから見えるイタリア式庭園とフランス式庭園、それらを囲む木々は季節によって表情が変わります。図書館のエントランスは2Fですが、卒業生の皆様も、ぜひ係員に声をかけていただき3Fまで上って、その景観をご覧ください。もちろん、卒業生も図書館を利用することができます。

去年の5月にコロナ感染症が5類に移行し、講義や実習は対面に戻りましたが、一部はオンラインをとり入れた講義も続いています。オンライン・プログラムが中心だった全員留学制度は、海外留学ができるようになりました。大学から渡航費用の援助が出るものの、円安と航空運賃の高騰のため、皆さん苦労されているようです。

大学院園芸学研究科は、これまでの園芸科学コースとランドスケープ学コースに加えて、国際環境園芸学コースが去年の10月から新たに発足し、それにより、大学院全体の入学定員も増加しました。これまでの留学生のための英語プログラムを独立させたものですが、園芸科学プログラムとランドスケープ学プログラムに分かれるので、実質的にはあまり変わらないです。英語だけの専門授業が増えましたが、留学生と日本人学生が別々に学習するというのではなく、同じ教室で講義や演習を受ける場合が多く、留学生と日本人のグループワークも盛んに行われています。松戸で学習しながらの国際体験の機会が増えました。

戸定祭は、今年度からは西千葉の大学祭とは別日程（10月26、27日）に行われることになり、松戸と西千葉の学生が両方の大学祭に参加できるようになりました。この機会に皆様もぜひ、松戸キャンパスにお越しください。

今後とも、卒業生の皆様におかれましては、ひきつづき母校へのご支援をよろしくお願いいたします。



現役の学生さんと卒業生のお役に立てよう頑張ります。

戸定会副会長 富岡典子

戸定会会員の皆様初めまして。令和6年6月の総会で戸定会副会長に就任させていただきました富岡典子です。齋藤会長からのお誘いで2年前から本部理事をさせていただいておりましたが、なかなか行事に参加できず、右も左もわからないままの就任です。齋藤会長の現役生に女性が多い中で戸定会の役員に女性が多いことは彼らの助けになるとのお言葉にほだされて就任に至りました。

私は昭和58年に農芸化学科を卒業し、環境庁（現環境省）国立公害研究所（現国立研究開発法人国立環境研究所）に入所後40年間研究職として勤務致しました。霞ヶ浦のアオコ対策に畑地への適正施肥や、休耕田を用いた脱窒、畜産廃棄物の管理など、どちらかと言うと農家の方から煙たがられる仕事もしてきましたが、最近は農家の方も環境に配慮してくださるようになり、対策が進んでいます。

私が就職した頃は、200人いる研究員の内女性は私を含めて4人で、女性であるが故の苦労もありました。少しずつ改善されてきてはいますが、男性も含めて子育てにはまだまだ、大きな苦労があるようです。齋藤会長の園芸学部卒業生が男女関係なく輝いていけるよう少しでもお役に立てればとのお気持ちに寄り添って参りたいと思います。

私の戸定会との関わりは、お酒やリングが魅力だったのと、学生さんの役に立つかなぐらいの気持ちでちょっと寄付をするぐらいでしたが、理事として参加させていただいて、積極的に現役生や若い戸定会会員と関わろうとする、前会長や現会長、副会長のお姿を見て、お手伝いできたらと考えました。自分が先輩の背中を追って、研究の仕事に就いたように、輝いている先輩は大勢いらっしゃると思いますので、多くの先輩と現役生の橋渡しをできる戸定会にできればと考えております。

6月に開かれた理事会総会と同日に開かれた戸定会支部長会議に同席させていただき、戸定会を支える屋台骨としての支部会の存在と、現役生に寄せる卒業生の期待を伺い、同窓会の意義を改めて感じました。地元に戻った時支えてくださる先輩がいることを、学生さんにもっと知っていただくにはどのようにすればよいか、難しい問題ですが少しずつ考えていきたいと思っています。

勉強不足で微力ですが齋藤会長と共に夢の実現に向けて頑張りたいと思います。

ご指導、ご支援のほどどうぞよろしくお願い申し上げます。



退任のご挨拶

戸定会相談役 加藤一郎

今年の戸定会総会で会長職を退任し、相談役に就任いたしました。思い起こせば2012年の総会で副会長に就任いたしました。その年の戸定会会報には「伊東戸定会長の手足として、①支部活動の活性化②戸定会の財務健全性を将来に向けてどう保つかに全力を尽くす」と記載しました。その後、2016年から伊東会長の後任として4期8年間、戸定会会長を務めさせていただきました。今年、後期高齢者となり、頭と体力の劣化を自覚し会長職を退任いたしました。この間、賀来副会長、齋藤京子新会長の素晴らしい人格、識見に触れて自らの見識を高めることができました。また、佐藤さん、宇佐見さんとの毎週の打ち合わせを通じて、戸定会活動の活性化に貢献できたのではないかと思います。また月1回開催してきた大学の先生方とのパートナーシップ会議は7月で84回を重ねました。この会議には事務課長にも参加を頂き、同窓会、先生方、事務方と一体となった運営は千葉大学の他学部にはない優れた運営方法になったと思います。組織の運営には当然お金がかかります。戸定会会長としての活動は常に寄付金集めのような気がします。100周年記念行事、また図書館の裏庭の整備費5千万円の募金活動には同窓生だけでは無理と判断して、植島後援会会長とともに近隣の企業を訪問しご寄付のお願いをしました。初めての企業訪問で寄付をお願いするのに躊躇しましたが、しかし慣れてくるとその企業が園芸学部をどう見ているのか非常に勉強になり、また親しくなることもでき、だんだん苦にならなくなりました。またこの活動を園芸学部の歴代の事務課課長と一緒にやり、苦労をともにすることで親しくなることができました。寄付された企業に戸定祭にも参加頂き、より親交を深めることができました。市民に対するクラウドファンディングも初めての経験でした。図書館脇の寄付者の名盤を見るたびに寄付活動を思い出します。園芸学部とは無縁の私のゴルフ仲間の方からも寄付を頂きました。また、戸定会会員からの寄付金を集める方法として、2万円以上寄付をされた方には沼田のリングないしは千葉大の製品、また横綱審議会会長（千葉大医学部卒業生）の実家の酒造会社のお酒（個人のラベルを張ることができる）を選択肢に入れました。毎年、400万円以上の寄付金を頂いております。この紙面をお借りして御礼をいたします。また齋藤新会長が始めた女性の就職支援活動を通じて、学生時代は男女が対等の立場で付き合いをしても、企業に就職すると、まだまだ結婚、出産、子育てがハンディキャップになっている現状の認識を新たにいたしました。戸定会支部の女性の理事もまだまだ少なく各支部に女性の理事を就任して頂くよう依頼し、山口支部で初めての女性の支部長が誕生しました。今後とも戸定会への皆様の熱いご支援をお願いして退任の挨拶とさせていただきます。



退職のご挨拶

環境健康フィールド科学センター 教授 小 原 均

本年3月に定年退職を迎えました小原 均です。私は千葉大学園芸学部果樹園芸学研究室に所属して昭和57年3月に卒業し、大学院園芸学研究科に進学しました。2年次になり平田尚美教授から、農場助手のポストに空きができたので、大学院の修了まで待たずに助手になりませんか、との突然のお声掛け、リンゴ農家の長男で出身地の長野県へ奉職したいという思いもあってかなり悩みましたが、お引き受けします、として昭和58年8月に附属農場助手に採用されました。



採用後、利根高冷地農場（現本センター森林環境園芸農場）へ10年間の勤務との命で赴任しましたが、昭和62年に再び平田教授から果樹研の助手ポストが空いたので果樹研に来ませんかとのお声掛け、附属農場では3年余り勤務後に昭和62年7月に園芸学部助手に配置換えとなりました。平田教授の後任の松井弘之教授は米国ミシガン州立大学との共同研究で米国へしばらく通われておりましたが、平成7年4月から11月までとその後複数回短期で代わりに私を送り出してください、米国での研究生活はとてもよい経験となりました。その後、講師、助教授になり、平成15年4月には附属農場を附置施設として包摂した本センターが設立され助教授として配置換えられ、平成27年4月に本センター教授になり、千葉大学で40年8月を務めさせていただきました。

研究は果樹果実の高品質・高付加価値化などを目的に、実際栽培で利用できる植物成長調節物質の探索や目的に応じた利用方法の開発ならびにこれらの物質の作用機構の解明など行ってきましたが、恩師や同僚の先生方によるご指導、技術系職員や多くの指導学生、また、複数県の試験場や栽培農家の方々にも多大なご協力をいただきました。深くお礼申し上げます。また、社会貢献として平成14年から複数年に渡って行われた園芸学部HPの園芸相談Q&Aは学科を超えた多数の教員の皆様のご協力に支えられたものであり、そこに関わったことは忘れたくない経験となりました。また、事務職員の皆様には本当にお世話になりました。深く感謝申し上げます。

平成30年度から2年間戸定会学内副会長を務めさせていただき、それ以降加藤一郎会長はじめ本部役員の皆様や事務局の佐藤様、宇佐見様にも本当にお世話になりました。誠にありがとうございました。

最後に、園芸学部、本センターならびに戸定会の益々の発展を心よりご祈念申し上げます。

退職のご挨拶

園芸学科 教授 椎 名 武 夫

本年3月末に定年退職を迎えた、椎名（旧姓・小野寺）武夫です。本研究科には、2014年4月1日に、当時の農研機構食品総合研究所から農産食品工学研究グループ（現在の名称）の教授として着任して以来、10年間勤務させて頂きました。前職以来、青果物の品質保持を中心課題として扱う「ポストハーベスト工学」分野で研究を行ってきました。研究者人生を振り返ると、岩手大学農学部農業機械学科を卒業し、1年間の研究生を経て、1982年に農林水産省に農林水産技官として採用、農林水産省食品総合研究所に研究員として配属され、食品の物流時の振動による物理的損傷を室内で等価に再現する輸送シミュレーション、カットおよびホール野菜の品質保持とMA包装、農業・食品分野におけるロスを考慮したライフサイクルアセスメント（LCA）、紅麴関連製品で大きな話題となっている機能性表示食品とも関連する「機能性・食事バランスデータベースの開発」、などの研究を実施しました。前職では農林水産省等が実施するプロジェクト研究に参画実施し、園芸学研究科に異動する少し前からは農業分野の競争的研究資金や科学研究費助成事業の獲得にも努めました。本学においては、2017年に科研費基盤研究（A）を獲得し、「オミクスを活用した革新的青果物品質評価・品質管理システムの開発」を実施することができました。専門が農学と工学の境界分野ということもあり、多くの学会に参画し学会誌編集委員等の専門委員の他、理事、会長を務めるとともに、各種の賞を頂くことができました。また、輸送シミュレーションに関連しては、輸送包装の適切性を評価するための試験方法等に係るJISやISOの規格開発にも携わることができ、2022年には産業標準化事業表彰で経済産業大臣表彰を受けることができました。学部卒で研究分野に足を踏み入れた私が、ここまでどうにか研究者としての研究活動を継続できたのは、ひとえに周囲の方々のお力添えによるものであり、また園芸学部・研究科では小川幸春先生の支援、学部生、博士前期および後期課程の学生の若い力を頂き、感謝に堪えません。



4月からは、企業との共同研究実施のための特任研究員、またグランドフェローとして松戸キャンパスに残り、研究教育活動を継続しております。最後になりましたが、本学および本研究科（院）の益々の発展を祈念するとともに、これまでのご支援に感謝申し上げます。

退職のご挨拶

緑地環境学科 教授 小 林 達 明

本年3月に定年退職いたしました。学部長在任時は、アカデミック・リンク松戸募金で皆様方には大変お世話になりました。おかげさまで学生に評判の良い図書館ができ、心より御礼申し上げます。

当方は1985年8月に園芸学部緑地環境学科に赴任しました。当時、B棟が改修工事中で、B棟に研究室があった環境植物病学や環境生物学の研究室もD棟に仮住まいされており、元からD棟に研究室があった環境植栽学、緑地保全学、緑化植物学の3研究室と合わせて学科の全研究室が同じ建物にいて、相互の行き来が盛んでした。とくに、わが緑植の学生は全員男子で、午後4時くらいになると各研究室の男子が集まり更衣室状態となり、その後皆で体育館バレーボールという日々でした。当方も大学院中退で赴任したので、学生とあまり年の差がなく、毎日バレーボールに参加し、学科全員の学生と知り合いになるという今では考えにくい和やかな様子でした。

学科の同僚助手には、雨宮先生、天野先生、藤井先生、沖津先生がおられ、さらには助教授にも三沢先生、本山先生と学部の体力自慢の先生方が集まっておられ、また、雨宮・沖津を筆頭に酒豪揃いで、学生ともども飲み会で夜明けを迎えることもしばしば、梁山泊のような戸定が丘でありました。

今でこそ環境と名のつく大学はたくさんありますが、当時環境を冠した学科は確か全国で3つしかなかったと思います。そのためか、意識の高い学生が多く、個性豊かで、環境志望で大学に進学した自分も仲間意識がありました。学科の5研究室のうち、新設の緑地保全が自然保護を、緑化植物が環境緑化を担当していました。ただ、時代は少しずつ変わりつつあり、学科創設当時の課題が公害対策と自然保護だったのに対し、1980年代に入ると次第に地球環境問題がテーマの中心に移り変わっていきます。

私は幸いにも、赴任翌年から中国で砂漠化問題に関するフィールドワークに携わることができ、その後、生物多様性保全、気候変動に関わる課題に関わり、若い時に持った問題意識をもとにずっと研究でき、幸運な教員人生だったと思います。2011年からは、福島原子力災害に取り組みました。実は、まだその試料と日々格闘しておりますが、必ずや研究を仕上げて、わが国が体験した貴重なデータを後世に伝えていきたいと考えております。

大学や戸定会にお世話になったことに言葉は尽くせませんが、最後に園芸学部の発展と戸定会の皆様のご健勝をお祈り申し上げ、感謝の言葉とさせていただきます。



退職のご挨拶

食料資源経済学科 教授 高 垣 美智子

本年3月に定年退職を迎えました。1988年に園芸学部附属農場助手に採用されて以来、昭和・平成・令和に渡り大変お世話になりました。

園芸学部在学中は、尾瀬や農業試験場でのアルバイト、養液栽培の卒業研究、浩気寮での生活など、先生方や同級生に恵まれて充実した学生生活を送ることができました。卒業後、大学院で熱帯農学を学びタイ・カセサート大学に留学しましたが、「園芸」から遠ざかったこともあり園芸学部に戻ることは無理だとあきらめていました。タイから一時帰国した折に参加した同級会で、小原均先生から「農場の移転を担当する教員を募集している」という話を聞き、自分にも機会があるかもしれない、と応募し、恩師の先生方の応援にも助けられて採用されました。

農場の移転、全学科の農場実習、農場技官の方々との協働、と松戸キャンパスから離れた場所で、学部研究室の教員とは全く異なる内容の仕事も多かったですが、実りある経験を積むことができました。1996年末からは、留学生専門教育教官として松戸キャンパスの留学生生活支援や国際交流の推進に関わりました。10年余りの間に、大学の法人化、古在学長の誕生、博士課程の設置、大学院英語プログラムの開始など大学全体の国際化推進の動きもあり、様々な新しい取り組みを行うことができました。留学生と行った色々な行事は楽しい思い出です。

この間、園芸学部附属農場は柏移転の完成を待たずに、敷地の1/3を文科省に割譲して、2003年に全学の「環境健康フィールド科学センター」に改組されました。崇高なコンセプトで開始されたセンターですが、担当の先生方は従来の業務もそのまま兼務することになり多大なご苦勞をおかけする状況になりました。2010年からは当時の天野センター長の依頼で運営に関わることになりました。

また、2016年から4年間は、新しく開設された国際教養学部の専任教員として西千葉キャンパスに異動し、3キャンパスを移動する毎日を送りました。園芸学部・研究科に戻ってきた2020年から始まった「全員留学」の取り組みには、担当教員として関わり、コロナ禍対応としてオンライン留学プログラムの開発・実施などを行いました。

振り返ってみると、学内の様々なセクションの多くの教職員の皆様や学生と関わることでできた勤務で、楽しく過ごすことができました。お世話になり、本当に有難うございました。

園芸学部・研究科のますますのご発展を祈念しています。



新任のご挨拶

食料資源経済学科 助教 加 藤 弘 祐

2024年3月より食料資源経済学科助教として着任いたしました加藤弘祐と申します。所属講座は食と緑の健康創成学講座となります。本学着任前は、国立研究開発法人や他大学にて研究及び教育に従事しておりました。学生時代にも食料資源経済学科の所属として園芸学部で学び、現教員陣の先生方にも大変お世話になりました。今度は教員という立場となりましたが、こうして再び、学び親しんだ園芸学部・松戸キャンパスに通うことができるのは望外の喜びです。また、それと同時に、学生時代よりお世話になっている先生方に加わり教育を担当する責務の重さを感じており、身の引き締まる思いです。

本学在学時の指導教員は、2023年3月に定年を迎えられた本学名誉教授小林弘明先生に務めて頂き、就職後にも博士論文のご指導を賜りました。特に、国立研究開発法人在職時には、研究を進めるにあたり、小林先生から全面的に非常に心強いご指導・ご支援を頂きました。また、大学院修士課程では東京工業大学名誉教授出口弘先生にご指導いただきまして、修士論文を通して得た経験は、今なお大きな財産となっております。小林先生や出口先生をはじめとして、前職までに関わった多くの方々には、現在に至るまで、様々な場面でお力添え頂いております。私がこれまで研究という仕事を続けてこられたのは、そうした多くの方々に手厚くご支援頂いたおかげです。この度の着任の挨拶にあたり、お世話になりました皆様にこの場をお借りしてあらためて深く御礼申し上げます。

専門の研究分野は農業経済学となりまして、とりわけデータマイニング手法を利用した研究に取り組んできました。これからの研究では、ネットワークを広げ、様々な研究テーマに取り組んでいくことが目標です。直近では、栗原伸一先生のご紹介で米国のペンシルバニア州立大学に訪問させて頂き、大変大きな刺激を受けました。今後は、ペンシルバニア州立大学の先生方をはじめとした海外の研究者の方々との国際共同研究にも積極的に取り組み、専門分野にとらわれず、研究の裾野を広げるような仕事をしたいと考えております。そして、学生指導においても、そうした経験を還元し、学生自身の国際経験へと繋がるような教育ができるよう努めたいと思っています。戸定会会員の皆様には、恐縮ではございますが、今後ともご支援ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。



新任のご挨拶

緑地環境学科 助教 江 暁 歆

2023年10月1日、千葉大学園芸学研究科ランドスケープ・経済学講座の助教として着任しました江暁歆（こうしょうかん）です。園芸学研究科の留学生担当教員を務めています。

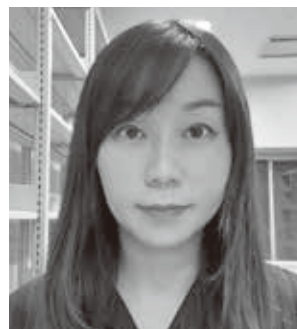
私は都市緑地の持続可能発展に寄与する「グリーンインフラ」に関する研究を行っています。グリーンインフラとは、従来の人工構造物によるグレーインフラに対し、自然が持つ多様な機能を賢く利用する土地利用計画です。私はこの手法と考え方を市民に発信し、緑地のウェルビーイング効果を発揮させ、低コストの緑地の維持管理でコミュニティの自然と社会環境の保全・改善を実現することを目指しています。

私は中国の広西壮族自治区南寧市で育ち、2011年に浙江大学農業与生物技術学院のランドスケープ専攻で学士号を取得しました。学部生の時から持続可能発展や緑地環境に関心を持ち、千葉大学との協定締結をきっかけに、千葉大学園芸学研究科への留学を決心しました。日本語学校での勉強を経て、2013年に千葉大学に入学し、緑地環境学専攻で修士号と博士号を取得しました。

博士卒業後は園芸学研究科の博士研究員として、グリーンインフラに関する研究を続けながら、千葉大学の職員として学部教務や留学生支援、奨学金業務などに従事してきました。職員としての5年間は、千葉大学の学生・留学生として経験したことや、不足していると感じたことから、留学生支援における課題を解決するために注力してきました。特に留学生支援に力を入れ、多くの国際学生が円滑に学業を進められるようサポートしてきました。

2023年、園芸学研究科は国際環境園芸学コースを設立し、留学生担当教員の公募を機に千葉大学の教員となる機会を得ました。千葉大学の国際交流は私に留学生として日本で研究を進めるチャンスを与えてくれました。母校への恩返しとして、昨年から留学生向けの就職ガイダンスや交流イベントを企画し、留学生コミュニティの構築に努めて参りました。なお、海外の大学や研究機関との連携を深め、グローバルな視野での教育と研究を推進しています。

今後、私は園芸学研究科の教員、そして留学生担当教員としての役割を果たし、これまでの経験を活かして園芸学研究科の国際化に貢献し、留学生が安心して学び、成長できる環境を整えることを目指して取り組んでまいります。皆様のご指導、ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



新任のご挨拶

大学院園芸学研究院 食と緑の健康創成学講座
講師 加川 夏子

2024年4月1日より大学院園芸学研究院、食と緑の健康創成学講座に着任しました、加川夏子（かがわなつこ）と申します。千葉大学柏の葉キャンパス（柏市柏の葉6-2-1）にある環境健康フィールド科学センターから配置換えにて松戸キャンパスへ参りました。新しい研究室は、松戸B棟1階に植物化学研究室として5月末に移設しました。松戸地区では新参者ですので、戸定会の皆様、どうぞよろしくお願い申し上げます。



私の専門は有機化学であり、研究経歴は東北大学薬学部（仙台市）に始まり、大阪（堺市）、米国（シカゴ）、奈良（生駒市）を経て、千葉大学で最初の勤務地は薬学研究院（西千葉地区）でした。そして薬学部の移転に伴い玄鼻へ、続いて柏の葉、今回は松戸へと研究環境を変えてきました。教育では理・工・薬を経験しており、園芸では新たに農芸化学の研究教育活動に貢献して参ります。

当研究室では、植物の生産する成分（化合物）の分子構造を決定したり、どのくらいの含量であるのか測定したり、有機合成で作ったりすることで、植物の持つ力を高効率かつ環境低負荷で、人のために安全に利用することを目的としています。天然物化学、分析化学、有機合成化学をツールとして、主に薬用や食用の植物を研究材料とし、専門を異にする研究者らと積極的に共同研究を実施しています。これまでの研究一例を挙げますと、植物工場のような高度環境制御型施設にて異なる環境条件下で生育された、薬用赤シソ・食用青シソの有効成分含量の変動を解析し、特殊な環境で生育すると選択的に薬効成分が増量することを明らかにしました。日本市場では現状、生薬の基源植物や健康食品素材等のもつ成分に価値がある製品の開発において、植物原材料の供給源を天然資源や国外からの輸入に依存しがちですが、上述のような研究は、栽培環境による品質管理体制を整え、国内栽培品を用いた完全国産化に転換していく技術開発を推進するものです。そして、環境や天然資源の保全、循環型の生産製造、医薬品等の安定供給へつながることを期待します。

教育活動では、主に園芸学部・園芸学研究科の学生達に対し、化学系専門科目を指導して参ります。彼らとの出会いを大切に、この学び舎で得たものを糧として、将来彼らが自信を持って自らの選択を進んでいけるよう、誠意を持って研究活動を支援して参ります。何卒よろしくご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

学科近況

園芸学科の近況

園芸学科長 教授 穴戸 雅宏

園芸学科の近況をお知らせします。園芸学科と大学院園芸学研究科の園芸科学コースでは、令和6年3月に学部62名の卒業生、博士前期（修士）課程64名、博士後期（博士）課程3名の修了生を送り出しました。さらに、令和6年4月に学部68名、博士前期（修士）課程71名、博士後期（博士）課程6名の新入生を迎えました。

卒業生の進路は、学部の場合、進学62%、就職（無期限雇用）36%となっています。就職先は公務員（国家6%、地方16%）が多く、その他には農・林業関係、食品関係、IT・情報通信関係、流通・卸・小売業、建設・不動産等になっています。博士前期（修士）課程の場合、進学10%、就職（無期限雇用）83%となっています。就職先は食品関係（29%）が多く、その他には公務員や研究機関、公益団体、農業・園芸関係、医薬品・製薬・医療機器関係等になっています。

人事では、椎名武夫教授が令和6年3月末で定年退職されました。残念ながら、令和6年4月からの新教員の着任はありませんでしたが、この学科近況を書いている時点で公募中の人事がありますので、今年の秋以降には良いお知らせがあると思います。

一方、昨年度（2023年4月）から園芸学研究科に新設された国際環境園芸学コースには、同年10月から学生受入れが始まりました。この新コースでは園芸学関連の授業も英語で行われることから、園芸学科の教員も数名が兼任で担当しています。

ところで、長らく続いたコロナ禍の影響もかなり少なくなり、令和6年度の園芸学科の授業は約9割が対面型に戻りました。しかし、怪我の功名的に習熟したメディア授業の長所を生かすべく、対面での講義でも最低1回はメディアツールを使ったりリモート講義を取り入れて授業を行っています。また、遠隔地で行う講義には基本的にオンデマンド型のメディア授業形式を採用しており、受講学生および担当教員の両方にメリットがある状況になっています。



植物の形質を高度に取得するリモートセンシング技術の開発

応用生命化学科の近況

応用生命化学科長 教授 江 頭 祐嘉合

戸定会会員の皆様方には、日頃より学科の活動にご支援いただき、篤くお礼申し上げます。応用生命化学科の近況をお知らせします。人事では、令和6年4月に加川夏子講師(専門：有機化学)が着任され、松戸キャンパスB棟にて研究活動を開始されています。

さて今年の新入生対象の応用生命化学セミナー合宿は、6月に「高尾の森わくわくビレッジ」で行われ、卒業生の板倉彰吾氏(キューピー㈱)と小澤彩花氏(小川香料㈱)が大学生活、社会人生活などについて講演してくださいました。また、フィールドアスレチックを活用した体験学習を通じて学生・教員間で親睦を深めました。これらの学生達は2年生になると夏季・春季の休暇を利用した短期留学で視野を広げ、3年生の前期に研究室配属を決めます。今年は当学科の飛び入学(17歳大学入学)の学生も研究室が決まり研究活動に励んでいます。

研究に関しては、園芸学研究院のフロンティア研究プロジェクトに採択された宮原平講師の「紫ニンジン遺伝子改変による新色品種の開発」に関する研究成果が学術誌「The Plant Journal」に掲載されました。宮原先生は新色の品種の開発に必要な未知のアントシアニン修飾酵素遺伝子を明らかにし、アントシアニン修飾経路の全容を解明しました。この研究はニンジン栽培に適する千葉県的气候を活かした新たな特産品の創出に繋がることが期待されます。一方、学部4年生の三井彩花さん(指導教員：天知教授)は、日本土壤微生物学会2024年度大会において「カプロン酸のVerticillium dahliaeに対する生育阻害効果の検討」に関する研究ポスター発表を行い、ポスター賞を受賞しました。また、修士1年生の高井香綸さん(指導教員：江頭教授)の研究内容「野菜・葉草の脂肪肝抑制に関する研究」が、読売中高生新聞の特集「マナビビト」に掲載されました。

R5年度の当学科の大学院進学率は80%を超え、大学院修了後の就職は、ハウス食品、キッチンマン、キューピー、森永製菓、かどや製油、アサヒ飲料、伊藤園などで、昨年と同様に食品関連会社への就業割合が高かったです。今後の活躍を期待します。

以上、簡単な近況報告ではございますが、今後とも学科活動へのご協力をお願い申し上げます。



応用生命化学セミナー合宿における体験学習の様子

緑地環境学科の近況

緑地環境学科長 教授 木 下 剛

大学は、コロナ禍前の活気ある雰囲気を取り戻した観があり、やはり大学は学生あつてのものという想いを強くしております。しかも、コロナ禍前より、学生たちが熱心に授業や研究に向かうようになったと感じています。こうした学生たちの姿勢に応えるべく、我々教員も、野外での実習や見学、調査等に今まで以上に力を傾注しています。

卒業生の就職状況は、3プログラム(環境造園学、緑地科学、環境健康学)とも大学院進学が最も多い状況に変わりありません。今年の進学率は環境造園学が33%、緑地科学が47%、環境健康学が50%です。次いで、地方公務員や国家公務員、建設業、情報・通信業への就職が続きます。

その他の学科全体の動きとして、2023年度末をもって小林達明教授が定年退職されました。また、野田勝二助教が講師に、池井晴美特任助教が准教授に昇任されました。

さらに、今年から本学科は、文部科学省大学教育再生加速プログラムに基づく、千葉大学「次世代才能スキップアップ」プログラムの基礎力養成講座(古谷勝則教授、高橋輝昌教授、三島孔明准教授らによる)を開講します。これは園芸学部総合型選抜(いわゆるAO入試)の評価対象となる講座で、夏休みに全国の高校生の参加を得て行われるものです。

学生や教員の社会活動では、2024年6月の日本造園学会全国大会U30デザインコンペで、千葉大(保阪日南子さん、崔景舒さん、宮園茉莉亜さん、山下瑞貴さん)と東大のチームが最優秀賞、大学院の山本祐子さんが優秀賞、千葉大(林雨炫さん、張思語さん、櫻庭由樹さん、唐渡夏実さん)と北京林業大のチームが入賞を果たすなど、社会人を押さえて優秀な成績を収めました。また、齋藤雪彦研究室(地域計画学)が、令和6年能登半島地震の被害調査及び復興まちづくり活動を始動させたほか、秋田典子研究室(緑地環境管理学)が静岡県伊豆市で観光と防災を両立する初めての津波避難訓練を支援したこと、加藤顕准教授がリモートセンシング技術を用いた森林火災予防の研究で、NHK WORLD-JAPANの防災特集コーナー「BOSAI」に取り上げられたことなどが特筆されます。

以上、簡単な近況報告ではございますが、今後とも学科活動へのご協力をお願い申し上げます。



造園学会コンペ授賞式の様子

食料資源経済学科の近況

食料資源経済学科長 教授 栗原伸一

入学状況から報告させていただきます。本学科では、今年度から後期の小論文が学部共通の理科に変更されましたが、依然として高倍率を維持し（前期5.1倍、後期13.0倍）、優秀な32名が入学しました。大変、元気の良い新入生達ですので、充実した学生生活を送ってくれることでしょう。

次に、人事ですが、昨年度末をもって高垣美智子教授が定年で退職されました。高垣先生は、1982年に本学部園芸学科を卒業された後、京都大学大学院やタイ王国への留学などを経て、1988年に附属農場の助手として採用されました。2007年に本学科へ来られてからは、留学生支援などの国際交流だけでなく、環境健康フィールド科学センターのセンター長を兼任されるなど、柏の葉地区の発展にも貢献されました。研究面では、熱帯農業や施設園芸に関する多くの論文や専門書を執筆され、その業績は日本熱帯農業学会などからも表彰されました。なお、高垣先生には、今後も特任教授として柏の葉地区でご指導いただけることになっております。

さて、本学科に久しぶりに若い助教の先生が赴任しました。加藤弘祐（こうすけ）先生です。加藤先生は2016年に本学科を卒業後、農研機構研究員、日本大学助教を経て、今年3月に本学に採用されました。加藤先生の専門は、食や健康に対する消費者意識を機械学習で分析するという、若手らしい最新の研究で、授業も統計数理モデリングを担当いただきます。また、赴任早々、アメリカに調査に出向くなど、国際性も豊かな先生ですので、今後の活躍が大変楽しみです。

最後に研究ですが、今年度は、矢野佑樹講師の研究が科研費の基盤（C）に採択されました。これは、消費者の行動変容プロセスに着目して、食品安全性に関する効果的な教育介入方法を特定しようというものです。スマホの普及やSNSの発展は、我々消費者に便利な生活をもたらした反面、情報過多に陥らせてしまいました。こうした現代社会において、どのように食に関する教育をすべきかを明らかにすることは、大変重要な課題です。本研究の成功が期待されます。

以上、簡単な近況報告でございましたが、皆様方におかれましては、これまで同様、本学科への厚い支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



加藤弘祐助教のアメリカ調査
（左：サスケハナ川、右：アーミッシュ家畜市場）

園芸産業創発学プログラムの近況

園芸学科 大川克哉

園芸産業創発学プログラムは、次世代園芸産業の担い手の育成を目的に園芸学科および食料資源経済学科に学科横断的に設置した特別教育カリキュラムです。高度な栽培技術、戦略的経営感覚および国際性の修得を教育の柱としています。現在、このプログラムには4年生2名、2年生3名、1年生2名が在籍しています。プログラム履修学生は大学入学後の早期から園芸生産現場に触れるとともに、実践的で専門性の高い演習やインターンシップ等の特別科目（9科目）を履修しています。1年生では、園芸産業の現場を知ることによって先進的園芸産地視察や流通現場の見学を行っています。生産や流通現場等でのインターンシップについては、2年生には2週間、3年生には1ヶ月間を課しており、インターンシップを通して、我が国園芸産業の抱える課題や農地の多面的利用、農業を通じた国際貢献に対する認識や理解を深めています。一方、4年生は約6ヶ月インターンシップを行いながら、インターンシップ先が抱える課題の解決を図るための調査および研究を行うプロジェクト解決型の卒業研究に取り組んでいます。昨年度は、山梨県果樹試験場、ヤンマーグリーンシステム株式会社、株式会社アド・ワン・ファーム、株式会社Loco Door、ゴリラハイランズコーヒージャパンのお世話になり、それぞれのインターンシップ先での課題解決に取り組み、十分な成果をあげました。また昨年度の戸定祭では、園芸産業創発学のブースを学生自らの手で作り、プログラムの紹介、インターンシップ先の農産物や自ら加工したイチゴ飴の販売等も行いました（写真）。

なお、戸定会会員の皆様には、園芸産業創発学プログラムの教育、また関連学部科目の「園芸ビジネス論」等において、多大なご協力をいただいております。この場を借りて厚く御礼を申し上げます。一方、この園芸産業創発学プログラムのための園芸産業創発学プログラム選抜（特別入試）の志望者がやや減少しております。戸定会会員の皆様のお身近に、園芸産業に強い関心がある、あるいは将来の農業後継者として期待されている高校生等がおりましたら、是非ともこのような特別カリキュラムがあることを宣伝していただけると幸いです。



戸定祭でインターンシップ先の紹介や農産物を販売する
園芸産業創発学プログラムの学生

環境健康フィールド科学センターの近況

環境健康フィールド科学センター長 教授 渡 辺 均

環境健康フィールド科学センターの近況をご報告します。本年3月末に高垣美智子センター長、小原均教授が定年退職されました。両先生には、園芸学部附属農場時代から運営と教育・研究に多大なご尽力を賜りました。これまでのご指導に感謝申し上げます。また、4月1日付けで加川夏子講師が園芸学研究院へ異動されました。一方、魯娜助教が本年3月に准教授に昇任され、4月に池井晴美助教が国際高等研究基幹の准教授（センター兼務）に昇任されました。黒沼尊紀助教も10月に准教授に昇任されます。9月には、野田勝二講師が全国大学附属農場協議会で「全国大学農場教育賞」を受賞されます。センターの教育研究活動の充実と発展のため、日々努力を重ねております。

農場実習は園芸学研究院の先生方のご協力により、センター内で実施されております。6月～7月は猛暑の中での実習でしたが、学生さんの健康状態を第一に細心の注意を払って実施されました。また、長くコロナウイルス感染の影響で宿泊実習が行われておりませんでした。今年度から食料資源経済学科1年生の実習を森林環境園芸農場（群馬県沼田市）で行うことになりました。リンゴの摘果や収穫など、郊外農場でしか学ぶことができない実習が再開されることは大変喜ばしいことです。

センター内では、正門脇に「バイオ・健康オープンイノベーション拠点（仮称）」の建設が始まりました。この施設には、「園芸学研究院附属宇宙園芸研究センター」の一部の研究室が入居する予定です。2025年2月の竣工予定ですが、それまでは正門から管理棟、研究棟や売店への通行ができない状況が続きます。また、毎年11月3日に開催される「センター祭」も、今年は敷地内の別の場所で開催する予定で検討を進めております。

履修証明プログラム「多様な農福連携に貢献できる人材育成プログラム」は継続的に実施されておりますが、修了生を中心に新たな組織「柏千会」が立ち上がり、農福連携活動を中心として、センターと社会をつなぐ新たな活動が始まりました。

農場生産品を販売する「緑楽来（みらくる）」は、平日の13時～15時に開店しております。農場内で収穫した新鮮な野菜や果物、ジャムやハチミツ、花苗や鉢花、苗木などを販売しております。お近くにお越しの際には、是非お立ち寄りください。



仮設実験棟からセンター南側（水田・ハウス群）を望む

久々の戸定会奈良県支部懇親会を開催

奈良県支部長 國 本 佳 範（園昭62）

奈良県支部では現在34名の会員がいますが、ほとんどの会員の方とお目にかかる機会もなく、さらにコロナ禍の自粛モードも手伝って事実上の活動停止が続いておりました。前支部長の岩本和彦氏、会員の木村 衛氏の働きかけと戸定会事務局佐藤様のお力添えを賜り、去る令和6年5月18日（土）、奈良市内で？十年ぶりに懇親会を開催しました。

当日の参加者は5名でしたが、垣見さん（造昭39）を筆頭に木村さん（総農昭40）、中西さん（造昭56）、國本、松田さん（緑・環平8）と幅広い年齢層と学科構成となりました。特に垣見さんと木村さんが浩気寮の先輩後輩だったこともあり、木造時代の浩気寮の逸話や、事務局からお送りいただいた資料の授業料の話で盛り上がりしました。

今回の開催を契機として、今後少しずつ参加者を増やしていきたいと考えております。



2023年 新潟県支部（総会）の活動

7月8日、長岡市で支部総会、講演会及び懇親会を開催いたしました。上越方面や若手の参加もあり、計21名、フレッシュな会となりました。本部事務局（佐藤様代理）から会長のメッセージと母校の近況について報告をいただきました。

その後、明田川晋氏（環緑昭59/環緑専昭61卒）による「佐渡島の森と樹木～約30年の動態」と題し、講演をいただきました。管理放棄地など人為の影響が弱まり、大きな自然の力で変貌してきている森と木々について現況と、管理の課題についてもスライドにより講演していただきました。

懇親会では、おいしい料理とお酒をたのしみつつ、各自の自己紹介と近況報告を行い、会員相互の交流と親睦を深めました。今後とも多くの皆様に参加をいただき、活発な会になればと願っています。（気軽に参加をしていただける企画を幹事から提案したいと思っています。）

（報告者：新潟県支部 伊藤 直子（化専昭57/院自後平9））



群馬県支部だより

群馬県支部 榎川 聡 (院自後平12)

令和5年度群馬県支部総会は、4年ぶりの会場開催となりました。

群馬県支部では、令和5年度の支部総会を4年ぶりに会場で開催しました。久しぶりの会場開催のためか、当日は、昨年度のオンライン開催よりも多い22名の参加がありました。当日は、支部会員酒井宏さんによる講演「植物を利用した病害虫対策」をいただき、活発な質疑が交わされました。戸定会本部からは、加藤一郎会長と松岡延浩園芸学研究院長にご参加いただき、園芸学部の近況をお話いただきました。園芸学部の近況は、参加会員には毎年好評でして、こちらも活発な質疑が行われていました。久しぶりの顔合わせとなりまして、懇親会も大変盛り上がりました。参加会員皆さまが大変お元気そうでした。今後とも会場開催が毎年継続できることを願っております。



戸定会広島県支部の活動について

広島県支部長 真宅 成光 (造昭41)

広島県支部では令和5年11月25日にひろしま国際ホテルにて令和5年度支部総会並びに懇親会を開催しました。本部からは賀来宏和副会長が参加してくださり、11名と少人数ながら楽しい時間を過ごすことができました。

久しぶりの開催のため、支部会員の動向が十分に掴めていない状況からの再スタートでした。本部から支部会員情報や特別支援金をいただいたり、本部役員の派遣などの強力な支援のおかげで無事総会を開催することができました。

総会では女性2名の支部役員が選出され、今後は支部長、会計担当、東部地域担当、西部地域担当の4名で支部運営を行うことになりました。

懇親会では各自の近況報告などを行い、和気あいあいとした雰囲気でも盛り上がりました。

また、支部役員会を令和6年7月6日に開催し、本部総会の報告や今後の支部活動について協議しました。



令和5年度千葉県支部総会報告

千葉県支部長 奥倉 努 (生管昭56)

千葉県支部では、令和元年の房総半島台風やそれに続くコロナの影響で、長く対面での総会が開催できないまま4年が経過しましたが、令和5年10月、5年ぶりに千葉市内で支部総会を開催いたしました。

本部からは戸定会会長の加藤一郎様、大学からは松岡延浩園芸学研究院長様のご臨席を賜り、支部会員12名が出席し、総会並びに講演会、懇親会を開催いたしました。ご来賓からは、園芸学部の近況としてアカデミックリンクの竣工や宇宙園芸研究センターの設置などのお話があり、大きな環境の変化を認識したところです。

また、総会後は平成5年園芸卒で、現在千葉県農林総合研究センターの桑田主税室長から「ラッカセイ新品種Qなつつの育成」と題して講演をいただきました。参加した会員からも甘い甘いと、誇らし気な意見が多く聞かれました。

懇親会では、今回の出席者が久々の開催ということもあり少数となってしまいましたが、多くの会員から近況が寄せられており、次年度以降の盛会を誓い、有意義な時間を過ごすことができました。ありがとうございました。



福岡県支部総会報告

前福岡県支部長 濱岡 治 (生管50)

12月2日(土)4年ぶりの支部総会を開催しました。毎回地方支部(福岡、北九州、筑後)で持ち回り開催しており、今回は福岡地方支部が担当で一昨年春開園したばかりの高宮南緑地(高宮庭園茶寮)で開催、懇親会も同建物内にあるレストランで行いました。

会員18名のほかに毎回声をかけている山口と大分県支部から3名、それに本部から齋藤副会長にご出席いただき総勢21名の参加がありました。

各自園内及び施設内を見学後14:30開会、会長挨拶に続き講演会を開催。まず今回会場となった高宮南緑地について計画段階から関わってきた福岡市住宅都市局公園部長の宮本信太郎(環緑平4)さんより福岡市の民間活力を導入した公園整備の事例を含めた当緑地について、次にレンタルグリーン事業について(株)サン・グリーン代表取締役の宗健児(造平2)さんに、最後に齋藤副会長より園芸学部の近況報告をしていただきました。

引き続き総会を開催、会計報告の後役員改選を行いました。平成28年に9年間休眠状態にあった支部活動を再開、今



め移動の時間がなく助かりました。

回活動が軌道に乗ってきたことにより支部長を実際に園芸に携わってきた日高輝富（園昭57）さんに、地方支部長もすべて交代し、唯一私が会計に残ることにより大幅な役員の若返りを図りました。

また今回は久しぶりの開催ということで出席者全員から近況報告をしていただきました。懇親会場が同施設内であるため

いただきました。

講演会では、一般社団法人全国農業会議所専務理事稲垣照哉様（園経昭58年卒）から「食料・農業・農村基本法等の改正の動向と農地を巡る情勢と課題」という内容でお話し頂きました。日本農業のひと農地の現状を、食料・農業・農村基本法制定当時と現在の農業構造とで比較した結果、基幹的農業従事者の数が100万人以上減っているという現状に驚きました。また、食料・農業・農村基本法の一部を改正する法律案のポイントとして、「環境と調和のとれた食料システムの確立」という、初めて「環境」という文言が登場し、今後は化成肥料を余り使用しないなど環境負荷を抑えた政策が始まったとの事でした。

今後とも多くの会員の皆様にご参加いただき、活発な会になればと願っております。



令和5年度山形県支部総会および現地見学会

山形県支部幹事長 鈴木 光 則（生物平9）

戸定会山形県支部では、令和6年1月20日に令和5年度山形県支部総会の開催に併せて、現地見学会も同日開催しました。双方に戸定会本部より賀来宏和副会長も参加され、支部会員と交流し活発な情報交換ができました。現地見学会では「大山バラ園」を訪問し、支部会員の大山武彦氏から品種選定や生産出荷販売に関して今後の展望も含めて話題提供がありました。参加者からは経営に関することや栽培方法等について幅広い質問があり、専門性の高い質疑応答が行われました。総会の中で賀来副会長からは、園芸学部近況や国際園芸博覧会2027について動画を交えて説明頂き、普段なかなか知り得ない情報を聞くことができ、有意義な時間を過ごしました。懇親会では参加者同士が様々な話題で楽しく盛り上がり、美味しい料理とお酒を堪能することができました。数年ぶりに総会以外の事業も行い楽しいひと時を過ごすことができましたので、今後も会員同士が楽しく交流できるように支部運営を行っていきたいと思います。



総会



現地見学（大山バラ園）

戸定会埼玉県支部総会

埼玉県支部 高 橋 黄穂美（園別平19）

戸定会埼玉県支部では、従来総会案内を往復ハガキのみで行っていましたが、今年度から初めてQRコードを利用した出欠確認を行った所、初めて参加の方も増え23名の方にご参加

茨城県支部総会

茨城県支部長 高 栖 敬（生管昭47）

2024年度の茨城県支部総会を7月15日に開催しました。今回は県西支部の小竹節県西支部長、蓮沼俊男副支部長、中野一正事務局長らの企画で、筑西市にある「ザ・ヒロサワシティー」を会場に、総会・講演と見学研修を行いました。総会では来賓として来ていただいた賀来副会長から、戸定会会長に初めて女性会長が就任したこと、10月26～27日にかけて行われる大学祭で戸定ガーデンカレッジへの卒業生の参加の要請、卒業生と学生との連携の必要性が話されました。古谷学内副会長からは園芸学部が園芸分野に果たしている役割が大きくなり、アジアや中南米から多くの留学生が学んでいることなどが紹介されました。講演は「ザ・ヒロサワシティーの郷（まち）づくりと今後の展開」と題して広沢商事専務取締役野口稔夫氏の話をお聞きしました。元々は金属加工、精密金型設計製作の会社を営んでいた広澤清氏が、地域の人のために自然・健康・文化をテーマにした「郷（まち）づくり事業」を始めました。その一つが乗り物のテーマパーク「ユメノバ」で陸・海・空の様々な乗り物の展示施設です。見学会では減失の危機にあったYS-11、新幹線車両・寝台車特急北斗星・D51機関車、各種の消防車など歴史的に珍しいものを見ることができました。美術館では陶芸家で人間国宝となった松井



康成作品の企画展示、秀吉ゆかりの黄金の茶釜などを鑑賞しました。美術館周囲の庭園は千葉大学教授の設計と聞き、どこことなく親しみを感じました。美術館だけでなく「郷（まち）をつくる」という創設者の思いが伝わる各種の展示物に、感心しながらの見学でした。

今回の参加者はのべ15名で、例年になく少ない参加でした。会員の高齢化に伴い、もっと若い層への働きかけや重要さや支部組織のあり方などについて検討改善する必要性を感じました。

栃木県支部の活動

栃木県支部長 平 石 厚 夫（園昭54）

栃木県支部では、令和6年7月に百原名誉会長、富岡副会長をお招きして、総会及び講演会を開催しました。講演会では、私が「県立高校再編と特例校普通科における農業学習」と題して講演を行い、今後想定される地域の人口減少に対する高校再編等の動向や、露地野菜を核として地域に貢献する高校生のがんばる姿を紹介し、園芸の持つ可能性を再確認する等大いに盛り上がりました。



また、10月には、県東部の芳賀地域における園芸生産の現地研修会を開催予定であり、県内の園芸を巡る動向を勉強するとともに会員間の交流を深める機会として大変楽しみにしております。



栃木県支部総会・講演会（令和6年7月6日）

令和6年度戸定会神奈川県支部総会開催

神奈川県支部 小 山 義 訓（造昭52）

令和6年7月27日 横浜中華街に於いて、新型コロナの影響で令和元年度以来の開催でした。本年2月に久々の支部役員会を開催し準備を進め、本総会は横浜市が担当しました（神奈川県支部は三者（神奈川県庁、㈱サカタのタネ、横浜市庁）の2年ごとの事務局持ち回り方式で運営しています）。なお当日は、酷暑日、パリではオリンピック開会式が行われた日でした。

懇親会は、参加者最年長の棚橋圀成さん（園昭43）の乾杯の発声で開始。横浜中華街の美味しい料理を楽しみながら、参加者全員からの近況報告で各々の顔と名前を確認し懇親を深めました。なお、最年少は令和5年緑環卒の方でした。

恒例の山田康博さん（造昭47）の締め！で懇親会を散会しました。皆さん笑顔での楽しいひと時でした。

支部総会の議事はすべて了承され次期支部長は井上治郎さん（園昭63、県庁）です。

遠路また多忙の中お越しいただいた賀来宏和副会長、渡辺均環境健康フィールド科学センター教授に感謝申し上げます。

また、参集の支部会員の皆様、お疲れさまでした。そして久々の支部総会開催に向けて準備を進めてくれた横浜市の相場支部長、井上事務局長に感謝します。



今回の支部総会にあたり本部事務局の協力を得て現役学部生（院生含む）へのOBとの交流を兼ねた支部総会無料招待の呼びかけを図りましたが残念ながら参加者はなし。松戸戸定ヶ丘と横浜中華街の距離を感じるとともに、現役学生の方々の参加動機となるような魅力付けがもっと必要なことを痛感しました。

東京都支部だより

東京都支部長 濱 田 豊（生管昭47）

戸定会東京都支部ではコロナ禍の影響で、4年間、支部総会が開催されずにおりましたが、前支部長の招集により、昨年10月21日に新宿で臨時役員会（常任理事・理事合同会議）が開催され、新しい役員体制で運営することになりました。会議の中、集団指導体制を取り、支部長のほか4名の副支部長を置き、合議で運営することになりました。

また、その席で連絡網は郵便料金の値上げが予定されているため、今後はメールで対応しようということになりました。ただ、メール登録をしていない方々もいらっしゃるのので、逐次掘り起こしをして、賛同される方だけでも集めて組織化しようということになりました。



シンポジウム

そして、支部総会を令和6年7、8月に開催することになり、会場探しをしましたが、長い間、開催してきた四ツ谷駅前プラザエフ（主婦会館）で開催することになりました。

講師は戸定会事務局に依頼し、令和5年1月に園芸学部内に新設された「宇宙園芸研究センター」の高橋秀幸特任教授に依頼し、快諾を得て去る令和6年



東京都支部総会集合写真

7月27日に開催することができました。当日は来賓として齋藤京子戸定会会長のご臨席を得て、学部近況のお話をいただき、続いて高橋教授のご講演と続き、参加者全員による懇親会へと続き、盛大に開催されました。

なお、高橋特任教授からは、プロジェクターを駆使し、過去の研究からNASA、JAXAでの研究が紹介され、宇宙園芸研究のロードマップを示していただきました。

従来は、東京都庁、造園会社などの組織が事務局を務め、同窓の職員や社員を使っていましたが、今年は、役員の人脈で参加者を募っていただきました。そのため、多くの人が新しい顔ぶれとなりました。

令和6年度戸定会役員

(敬称略・順不同 ★前号発行以降新任 ◎学部連携委員) 令和6.9.1現在

名誉会長（研究院長）		★◎百原 新					
相談役		伊東 正 ★◎加藤 一郎					
監事		福岡 秀実 西川 嘉輝 郡司 正博					
理事	会 長	★◎齋藤 京子					
	副 会 長	◎賀来 宏和 ★◎富岡 典子 (学内) ★◎古谷 勝則					
	常任理事	東京	★濱田 豊 ★小寺 孝治	中島 宏 ★染谷 篤	住吉 泰男	外木 秀明	★◎町田 誠
		千葉	◎奥倉 努 藤家 梓	金子 文宜 和田 昭通	齊藤 威	富樫 俊彦	長嶋 孝志
		埼玉	★◎前田 敏之 吉澤 祥匡	時田 勉	間仁田 勝	吉岡 幸夫	★星 誠
		神奈川	★井上 治郎	◎小山 義訓	棚橋 罔成	山田 康博	中野 敏夫
		茨城	★◎高栖 敬 渡邊 朝治	小竹 節	長岡 徳樹	額賀 敏	★矢口 達弥
		学内	(庶 務)	齋藤 隆徳	★秋田 典子		
			(会 計)	井川 智子	★彦坂 晶子		
			(会報・名簿)	佐々 英徳	相馬亜希子	★竹内 智子	★矢野 佑樹
			(広報・HP)	古谷 勝則			
		戸定学術振興委員会	(委 員 長)	★中野 明正			
	本部理事		吉岡 重明 佐藤菜穂子	萩野 一彦 ★初谷 結花	志賀 聡 ★木内 博和	岩上 哲也	篠崎 豊
	支 部	支部長	理 事				
	北海道	石村 寛人	木村 篤	橋本 雅之	阿部 克巳	土谷 美紀	
	青森	若宮 佳一					
	岩手	佐藤 明	山口 貴之				
	宮城	篠崎 淳	遠藤 進	近藤 寛	齋藤 健		
	秋田	伊藤 博之	大隅 専一	山下 光弘			
	山形	小笠原和博	沖田 政明	奥山 寛子	加藤 久雄		
	福島	安斎 正典	草野 忠次 齋藤 勇樹	鈴木 安和	菱沼 勇	早福 晃	金成理恵子
	茨城	★高栖 敬	岡田 勉 内藤 栄 ★鈴木 榮	岡田 晴雄 中野 一正 信田 菊江	田宮 賢 寺田 誠 渡辺 幸夫	郡司 光一 蓮沼 俊男	鶴長 文正 細谷 和之
	栃木	平石 厚夫	田中 敏夫 田邊 千知	小池 毅	高野 孝夫	實示戸寿弘	直井 昌彦
	群馬	白石 俊昌	木村 光一 木村 康夫	酒井 宏 小倉愉利子	根岸 始 ★浅見 暁子	村岡 邦三	
	埼玉	★前田 敏之	岩崎 桂三 鈴木 邦彦	木口 恒夫 長谷川 勲	野原 宏 ★南原 恵子	星井 静一 ★高橋黄穂美	細井 民興 ★麓島 雅之
	千葉	奥倉 努	秋葉 利雄 鈴木 孝 福地 信彦	石田 和也 鈴木 健 松丸 恒夫	甲田 暢男 砂盛恵理子	越川 浩樹 曾我 浩	小滝 秀策 南雲 一夫
	東京	★濱田 豊	加藤 正明 前田 誠 ★田中 淳一	木村 栄一 三好 貴紀 ★五十嵐清晃	樋渡 達也 山下 容子	馬場 勝	平澤 貴弘
	神奈川	★井上 治郎	相場 崇 ★鈴木 幸子	★井上 雅人 ★塚原 潤	★上井 憲治 ★松田 純一	★齋藤 寧 安 健夫	鈴木 貴
	新潟	齋藤 健治	中野 優	森山 勉	和田 祥子	伊藤 直子	
	富山	西尾 正					
	石川	安田 公平					
	福井	北倉 芳忠	小林 恭一				
	山梨	植原 宣紘	山本 賢治	今井吉之助	岡 實		
	長野	★高木幸一郎	北原 千歳 三田 毅	金子 能呼 ★千野 博敏	杉山 利広 ★浦野 真一	中山 正男	西村 清利
	岐阜	成瀬 秀博					
	静岡	大谷 徳生	石川 健一 吉川 公規	小澤 俊幸 佐原 宏康	岡村 努 永田 博之	藤浪 正康	澤野 由明
	愛知	風間 一	梶野 保光	原 幹博			
	三重	堀川 義昭	田中 貞朗				
	滋賀		江見 和綽				
	京都	★加藤 友規					
	大阪	中西 広樹	仲村 啓	當内 匡	松原 秀也		
	兵庫	坂田 正史	大西 潤	原田 充	広脇 淳		
	奈良	國本 佳範					
	和歌山	鈴木 惣禄					
	鳥取/島根						
	岡山	加藤 泉	難波 久一	山田 貞宜	河田 育康		
	広島	真宅 成光	立川 真成	★国野 友子	★中野 麻美		

	山口	★多々良美春	石光 照彦	多々良健司			
	徳島	中野 一雄					
	香川	安藤 昭則					
	愛媛	影浦 章次					
	高知	★高野 恵子	楠瀬 武司				
	福岡	★日高 輝富	濱岡 治	★中村 英詩	★二又 朋則	★宗 健児	
	佐賀	久保 和則					
	長崎	★峠 純秀	★渡部美貴子				
	熊本	五嶋 映司	清住 昇	坂口 信夫			
	大分	志手 博	伊東 壮				
	宮崎	武内 和俊	押川 裕文	中武 卓博			
	鹿児島	城戸 清志					
	沖縄	花城 良広					
海外支部	中国・北京	安 玉堯					
	・南京	朱 月林					
	台湾						
	韓国	全 昶厚					
学内理事	秋田 典子	加藤 顕	齋藤 隆徳	高橋 一聡	◎華岡 光正	八島 未和	
	天知 誠吾	★加藤 弘祐	齋藤 雪彦	高橋 輝昌	濱 侃	柳井 重人	
	井川 智子	★加川 夏子	坂本 一憲	高橋 秀幸	彦坂 晶子	矢野 佑樹	
	池井 晴美	菊池 真司	櫻井 清一	竹内 智子	平井 静	吉田 行郷	
	岩崎 寛	木下 剛	佐々 英徳	武田 史朗	深野 祐也	吉田 英生	
	上原 浩一	栗原 伸一	穴戸 雅宏	長 泰行	◎古谷 勝則	魯 娜	
	宇佐見俊行	黒沼 尊紀	島田 貴士	塚越 覚	松岡 延浩	渡辺 均	
	梅木 清	★江 暁欽	霜田 亮祐	出口亜由美	◎丸山 敦史	渡辺 洋一	
	江頭祐嘉合	國分 尚	章 俊華	土肥 博史	◎三島 孔明		
	近江 慶光	児玉 浩明	淨閑 正史	◎中野 明正	南川 舞		
	大川 克哉	後藤 英司	相馬亜希子	野田 勝二	宮原 平		
	小川 幸春	近藤 悠	園田 雅俊	野村 昌史	◎百原 新		
	戸定学術振興委員会		(委員長)	★中野 明正			
			齋藤 雪彦	吉田 行郷	華岡 光正	★古谷 勝則	

令和6年度 戸定会理事会総会報告

- 日 時：令和6年6月8日（土）13：00～14：30
場 所：千葉大学園芸学部 100周年記念戸定ヶ丘ホール
出席者：70名（学外55名、学内15名）委任状146名 合計216名
（理事総数287名）
司 会：江頭祐嘉合学内副会長
1. 開会の辞：齋藤京子副会長
2. 戸定会名誉会長挨拶：松岡延浩 戸定会名誉会長（前 園芸学研究院院長）
百原新 新戸定会名誉会長（新 園芸学研究院院長）
3. 戸定会会長挨拶：加藤一郎会長
4. 成立条件の報告・議長選出：江頭祐嘉合学内副会長から、総会の成立
について報告
慣例に従い戸定会会長の加藤一郎氏が選出
5. 議事録署名人選出：栃木県支部長平石厚夫氏
岡山県支部長加藤 泉氏
6. 議事：
第1号議案 令和5年度戸定会会務及び事業報告 齋藤隆徳庶務担当
学内常任理事
令和5年度戸定学術振興委員会事業報告 華岡光正戸定
学術振興委員長
第2号議案 令和5年度戸定会会計決算報告 小原均会計担当学内常
任理事
第3号議案 令和5年度戸定会会計監査報告 福岡秀実監事
第4号議案 令和6年度役員（案） 江頭祐嘉合学内副会長
第5号議案 令和6年度戸定会会務及び事業計画（案） 齋藤隆徳庶
務担当学内常任理事
令和6年度戸定学術振興委員会事業計画（案） 中野明
正戸定学術振興委員会委員長
第6号議案 令和6年度戸定会会計予算（案） 井川智子会計担当学
内常任理事
以上1号議案から6号議案まで挙手による賛成多数で承認された。
7. 報告
1）支部長会議報告 茨城県支部長の高橋敬氏から、午前中に開催さ
れた支部長会議の報告
2）新・旧本部役員の紹介と挨拶
8. 閉会の辞：賀来宏副会長

令和5年度支部総会開催及び本部役員派遣の状況

開催日	支部名	開催場所	派遣役員
令和5年7月1日	埼玉県支部	さいたま市 大宮サンパレス	賀来 宏和（副会長） 松岡 延浩（研究院長）学生2名
令和5年7月1日	栃木県支部	宇都宮市 ニューみくら	加藤 一郎（戸定会会長） 佐藤 和美（事務局）
令和5年7月8日	新潟県支部	長岡市 割烹「魚藤」	佐藤 和美（事務局）
令和5年7月15日	茨城県支部	つくば市 ホテルグランド東雲	賀来 宏和（副会長） 古谷 勝則（学内常任理事）
令和5年9月2日	大分県支部	大分市 鼎（かなえ）	加藤 一郎（戸定会会長） 松岡 延浩（研究院長）
令和5年10月14日	千葉県支部	千葉市 京成ホテルミラマーレ	加藤 一郎（戸定会会長） 松岡 延浩（研究院長）
令和5年10月21日	長野県支部	長野市 宴席 油や	江頭祐嘉合（学内副会長） 松岡 延浩（研究院長）
令和5年11月18日	群馬県支部	高崎市 LABIバンケット高崎	加藤 一郎（戸定会会長） 松岡 延浩（研究院長）
令和5年11月25日	広島県支部	広島市 ひろしま国際ホテル	賀来 宏和（副会長）
令和5年12月2日	福岡県支部	福岡市 高宮南緑地 貝島住宅	齋藤 京子（副会長）
令和5年12月2日	秋田県支部	秋田市 和食扇屋	派遣なし
令和6年1月20日	山形県支部	山形市 ホテルNEW最上屋	賀来 宏和（副会長）
令和6年2月1日	山口県支部	防府市 山口県農林総合技術センター	加藤 一郎（戸定会会長）



飯田 格先生を偲んで

千葉大学名誉教授・飯田 格（いいた わたる）先生は、令和 5 年 9 月 8 日に逝去されました。102 歳というご長寿をまっとうされた生涯でした。ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

飯田先生は、昭和16年に千葉高等園芸学校を卒業後、京都帝国大学農学部にて植物病理学を修められました。同大学卒業後は農学部副手を経て、農林水産省に入省され、各地の研究所に勤務されました。そして、昭和44年に千葉大学園芸学部植物病学研究室教授として迎えられました。就任当時は大学紛争の真っ只中で、厚生補導委員長を任じられた先生は、学生対応で活動家らの罵倒を浴び、大変なご苦労を味わられたそうです。しかし、持ち前の粘り強さと当局即妙な対応で学生らを説得し、その人格と人徳から学内における先生への人望が広がり、昭和50年には千葉大学評議員および園芸学部長の要職に就かれ、大学や学部の改革に尽くされました。また、昭和58年から千葉大学付属図書館長、昭和60年から学長事務代理を務められ、千葉大学の運営と発展に幅広く貢献さ

植物病学研究室 教授 穴 戸 雅 宏（園昭58）

れました。一方、関係学会や社会活動においても、先生は多方面から請われ、日本学会議会員・幹事の他、日本植物病理学会会長等の要職を歴任され、昭和58年春には《勲三等旭日中綬章》の叙勲の栄に浴されました。

昭和60年 3 月をもって千葉大学を退官された後、敬虔なクリスチャンであった先生は日本キリスト教短期大学教授として務められる傍ら、旧約聖書に初出する植物の記録等、ヘブライ語を辿って研究を続けておられました。また、老境に入っては日本基督教団船橋教会付属シオン幼稚園の園長を務められ、当時、研究室の機関誌に執筆された「幼稚園顛末記」を読むと、先生の慈愛と誠実な態度が言葉の端々に滲み、感動を覚えます。日常生活では実に多忙を極めた先生でしたが、その生涯の根本において、時間の許す限り社会やご自身の周囲に対する奉仕を心掛けておられたのではなかったかと思います。長い間、本当にお疲れ様でした。安らかにお休みください。

会 員 計 報

前号発行後、ご逝去の報告をいただきました。

謹んで哀悼の意を表し、ご冥福をお祈り申し上げます。（敬称略：令和 6 年 7 月末現在）

〈旧職員〉	園昭40	草野 比佐代	造昭31	大熊 康之	総農昭35	塚田 正己	農別昭33	梅澤 征雄
旧職員 渡辺 重吉郎	園昭49	高橋 英光	造昭31	中村 祐治	総農昭35	水戸 守	農別昭33	山本 瑛
〈園芸学科〉	園令 4	水谷 匠吾	造昭32	小野 淳文	総農昭41	福岡 徹	農別昭35	曾我辺 明
園昭12	塩田 俊夫	〈農芸化学科〉	造昭33	吉武 恒男	〈農業生産管理学科〉		農別昭36	五十嵐 直秀
園昭16-3	飯田 格	化昭25	造昭34	伊藤 彰朗	生管昭51	中込 勝	農別昭37	木暮 清一
園昭18	川口 弘	化昭26	造昭34	河野 通世	〈環境緑地学科〉		農別昭38	中堀 宏昭
園昭24	石橋 憲二	化昭28	造昭34	佐藤 安春	環緑昭54	伊東 俊男	農別昭40	松田 紘
園昭25	樋口 節治	化昭29	造昭36	桜井 栄一	環緑昭54	玉川 哲雄	農別昭41	土屋 光政
園昭30	川越 仁	化昭30	造昭43	鹿野 久男	環緑昭54	本橋 俊一	農別昭43	岡村 彰
園昭31	金子 照	化昭36	造昭49	白石 照夫	環緑昭56	松栄 雄二	農別昭43	林 喜美雄
園昭31	小西 勇作	化昭37	造昭60	小野寺 治子	環緑昭58	佐藤 斎	農別昭44	三田 一郎
園昭32	白井 義一	化昭40	造昭63	小川 博功	〈生物生産科学科〉		農別昭45	坂村 敏夫
園昭33	高木 文男	化昭44	〈総合農学科〉		生物平9	丹下 佳子	農別昭47	吉森 義信
園昭33	田中 桃三	化昭50	総農昭28	増島 康良	〈緑地・環境学科〉		〈園芸別科〉	
園昭35	栗山 登	化昭61	総農昭30	飯塚 博久	緑・環平12	今川 裕介	園別平7	塚本 昌生
園昭35	野口 博正	〈造園学科〉	総農昭30	桜井 徳郎	〈農業別科〉		〈大学院〉	
園昭39	鶴田 志郎	造昭26	総農昭31	鶴岡 喜嗣	農別昭15	笠川 敏夫	園專昭53	河野 喜郎
園昭39	平林 哲夫	造昭30	総農昭34	篠原 忠弘	農別昭28	赤石 太一郎	生管專昭53	杉原 保幸

令和5年度卒業園芸学部就職先一覧

業 種	園芸学科		応用生命化学科	緑地環境学科			食料資源経済学科
	栽培・育種プログラム	生物生産プログラム		環境健康学プログラム	環境造園プログラム	緑地科学プログラム	
農業・林業	全国農業協同組合 アド・ワン・ファーム	箱根植木		茨城県庁			JA横浜
建設業				日比谷アメニス	西部造園 鳳コンサルタント 日鉄エンジニアリング グリーンライフ産業 いであ テレウス 清水建設	ID&Eホールディング (日本工営ビジネ スパートナーズ)	電音エンジニアリング
食料品・飲料・ たばこ・飼料製造業	キリンホールディ ングス 理研ビタミン		ロピア いなば食品				宝ホールディングス ヤクルト
化学工業・石油・ 石炭製品製造業	クミアイ化学工業						小林製薬
はん用・生産用・業 務用機械器具製造業							アグリテクノサーチ
輸送用機械器具製造業					名古屋鉄道		
情報通信業	東京海上日動シス テムズ 日比谷コンピュー タシステム	ポケモンセンター インフォテックサービ ス Natee	トランスコスモス	エスユーエス アイエスエイブラン	エスピック ソフトバンク		農中情報システム
卸売業					内田洋行		日本アクセス
小売業	パーク・コーポレー ション						クラダシ
金融業					東京センチュリー		JA三井リース 福井銀行 ブロックレアホール ディングス
保険業							エーアイエムサービス 第一生命保険
不動産取引・賃貸・ 管理業					サンケイビル イオンモール	オープンハウス	
その他の専門・ 技術サービス業						応用地質	電通PRコンサル ティング
宿泊業・ 飲食サービス業	カトープレジャー グループ	サイゼリヤ			ABアコモ		
学校教育						千葉県公立高等学校 教諭	
複合サービス事業			全日本空輸				
サービス業（他に 分類されないもの）	野沢園						
国家公務	農林水産省		厚生労働省		国土交通省	林野庁 国土交通省住宅局	東京地方裁判所 消費者庁 東京法務局
地方公務	千葉県庁 山梨県庁 埼玉県庁				東京都庁 松戸市役所 浜松市役所 横浜市役所 川崎市役所 広島県庁	千葉県庁	佐倉市役所 葛飾区役所

令和5年度修了園芸学研究院（大学院）就職・進路先一覧

業 種	園芸学研究科環境園芸学専攻園芸科学コース		園芸学研究科環境園芸学専攻ランドスケープ学コース	
農業・林業	丸種 公益財団法人園芸植物育種研究所	JA全農		
鉱業・採石業・ 砂利採取業			Magang (Group) Holding Company Ltd.	
建設業	日揮		横浜植木 Surabana Jurong 住友林業緑化	中国建築 AP Buildings 隈研吾建築都市設計事務所
食料品・飲料・ たばこ・飼料製造業	かどや製油 ハウス食品 味の素AGF Mizkan J plus Holdings 三栄源エフ・エフ・アイ ニッスイ 日本ハム オリエンタル酵母工業 ケンコーマヨネーズ ニッポン	合同酒精 アサヒ飲料 森永製菓 マルハニチロ キューピー 伊藤園 キッコーマン 日清食品 日本たばこ産業 ヤマサ醤油		
化学工業・石油・ 石炭製品製造業	小川香料 東色ピグメント レゾナック	アデランス アース製薬		
電子部品・デバイス・ 電子回路製造業	椿本チエイン		富士ソフト	
電気・情報通信機械器 具製造業	プログレス・テクノロジーズ			
その他の製造業	アートネイチャー			
情報通信業	野村総合研究所 NRIセキュアテクノロジーズ 農中情報システム NTTデータ・ビジネス 丸紅ITソリューションズ	NTTデータ 日鉄ソリューションズ	SCSK セック 東和システム NTTデータ 日立製作所	日本電気航空宇宙システム 農中情報システム ナビタイムジャパン TOKAIホールディングス
卸売業	良品計画		三井物産プラスチック	
小売業	セブンイレブン・ジャパン			
金融業	神奈川県信用農業協同組合連合会	日本政策金融公庫		
保険業	日本生命保険相互会社		全国共済農業協同組合連合会	
学術・開発研究機関	一般社団法人日本草地畜産種子協会 国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構			
その他の専門・ 技術サービス業	野村総合研究所 電通デジタル 日本工営 ジオブラン・ナムテック		建設技術研究所 ブレイスメディア	
サービス業（他に分 類されないもの）	アイザック			
国家公務	特許庁	農林水産省	環境省	
地方公務	東京都庁 柏市役所		地方公務局 東京都庁 静岡県庁	
進学	千葉大学園芸学研究科 総合研究大学院大学	DD 千葉大学園芸学部研究生	千葉大学園芸学研究科 DD（清華大学）	DD（北京林業大学）

卒業生だより

加藤 雅樹 (生物平22・院前平24)

遺伝・育種学研究室で佐々先生にご指導頂き博士前期課程を修了しました。現在は菓子メーカーでチョコレートとその原料の一つであるカカオに携わる仕事に取り組んでいます。最近ではカカオの病気や品種、生育状況について学ぶ機会もあり、在学中に学んだことを少し思い出しながら、業務に当たることも増えてきました。これから一層活躍できるように頑張ります！



山口 大倫 (園平24・院前平26)

大学院時代は、「梨」に関することを研究テーマとし、大学院を修了後は、「船橋市」の行政職として8年働き、現在は千葉県庁の農業職として、「船橋市」の「梨」産地の担当をしています。なぜか「船橋」と「梨」に不思議な縁があります。熱意のある農家さんと共に農業を盛り上げる今の仕事は、私にとって天職に感じています。



中山 智也 (緑環令2)



東京都庁に勤めて5年目になります。千葉大学で学んだ知識を活かしながら、都立公園の設計や整備、都道街路樹の維持管理等に携わっています。最近では、業務へのICTの活用にも積極的に取り組んでいます。

時々大学生活が懐かしくなり、あの頃が恋しくなります。でも今は振り返らず進みます。私の作る公園も、きっといつか誰かの青春の舞台になるから。

石井 (上地) 智子 (緑環平13・院前平16)

小林教授の下でミツバツツジの研究に取り組み、在学中にインタープリターの研修を受け、修士課程修了後に「自然体験を通して地域活性化を目指す」千葉自然学校に就職。設立当初から運営や事業に一通り携わってきました。千葉大学大学院の非常勤講師のご縁も頂いたので、これまでの経験を母校に還元できるよう「人と人と自然をつなぐ人」を目指して頑張りたいと思います。



山口 萌 (応生平31・院前令3)

食品メーカー勤務を経て、現在は繊維系の検査機関の化学分析部門で働いています。服や雑貨に有害な物質が含まれていないか、分析機器を用いて検査する業務に携わっています。多種多様な製品に囲まれ、毎日が学びの連続です。

休日にはアマチュア楽団で活動したり、職場の方々とスポーツを楽しんだりして、公私共に充実した日々を送っています。



佐野 光 (応生平30・院前令2)

分子生体機能学研究室で修士課程を修了後、ヤマサ醤油株式会社に入社し、醤油の基礎から応用まで様々な研究開発業務に携わってきました。今年の4月からは生産管理部に異動し、醤油製造の一端を担っています。

醤油を作る側になり、醤油醸造の奥深さや難しさをより強く実感する毎日です。高品質な醤油を生産し続けられるよう、日々奮闘しています。



藤森 佳奈 (食資令3)



倉庫会社の安田倉庫に入社して3年目になります。現在は品川地区の倉庫で、輸入医療機器を市場に出荷するための製造業を担当しています。輸入品のため想定外のトラブルが多く、日々四苦八苦しておりますが、品質が守られた医療機器を患者様に安定供給できるよう、これからも尽力し自己の成長に繋がりたいと思います。

齋藤 祐介 (食資平30)

現在、三松というドレスと呉服の会社に勤務しています。新規ブランドの立ち上げを担当していて、コンセプト決定やサイト制作、商品開発を進めています。大学時代は矢野先生からマーケティングや論文の書き方を教えていただき、大変お世話になりました。プライベートでは、今年開催予定のトライアスロンの大会に向けて絶賛練習中です。



ご存じでしたか 我らが同窓生探訪 ④

取材者：戸定会相談役 加藤 一郎（生管昭46）

今回は桑田主税さん（園芸学科平成5年卒業、院前期平成7年修了）への同窓生探訪です。

桑田さんは現在、千葉県農林総合研究センター研究マネジメント室長を務められております。昨年、当センター落花生研究室で関わった「多様なニーズに対応した落花生品種の育成」で日本育種学会賞を受賞され、昨年10月に戸定会千葉支部総会でその概要を講演されました。



（写真1）桑田さん受賞式の写真

Q1 私はJA全農勤務時代1980年に米国フロリダ州タンパの全農燐鉍株に出向し、4年間過ごしました。南北戦争以前、落花生は奴隷の食べ物と考えられていたそうです。その後、ピーナッツバターが誕生すると爆発的な人気となり、前菜からスープ、メインディッシュまで多様な利用方法が開発されたそうです。しかし、日本では用途が限定されているように感じます。なぜなのでしょう。

桑田氏：日本の落花生栽培は明治以降に始まり、千葉県では八街市を中心に産地が形成され、集荷や加工を行う業者が増えていきました。国産の落花生は、莢のまま煎る「煎り莢」の割合が多く、お土産などによく利用されています。ピーナッツバターやお菓子などの原料は安い輸入品を使うことが多いのですが、そのままでも味の良い国産の落花生は、「煎り莢」で消費が多いものと思います。

Q2 落花生は悪玉コレステロールを減少させ、血管の健康を保ち、生活習慣病を予防する効果があります。日本では脂質が少なく、カロリーも少ない落花生が、アーモンドの人気に比べて人気がないのはなぜでしょうか。

桑田氏：ナッツ類の健康機能性が注目され、アーモンドなどナッツ類の人気は確かに高くなっています。ピーナッツも十分な機能性がありますが、反面、ピーナッツは人によってはアレルギーを引き起こす可能性があります。このため、食品表示が義務付けられています。アーモンドなどのナッツ類はミックスナッツとして混ぜて利用して気軽に楽しめませんが、ピーナッツは他の食材と混ぜて利用するのが難しいことも理由だと思います。

Q3 日本では農林省指定落花生育種試験事業が三重県から千葉県に移管され、落花生の育種事業への千葉県農試の責任が増大しました。このなかで「Qなつつ」が販売開始されました。私もQが大好き

で県外に行くときのお土産にしております。「Qなつつ」を開発した経過を教えてください。

桑田氏：落花生の美味しさの指標としては甘みが強いことが重要で、甘みの主要素であるショ糖含量が高いことを目標に選抜しました。「Qなつつ」の煎り豆では、はっきりとした甘みを感じ、莢の外観品質や収量性も優れています。「Qなつつ」という名前は公募した中から選んでいて、アルファベットの並びがPの次はQであり、ピーナッツを超える味という思いを込めて、名付けています。2018年に加工商品の販売が始まり、生産は徐々に拡大しています。

Q4 落花生の生育を知らない方が大勢います。落花生の花が咲き、地中で実ることも知らない方が多くあります。落花生の根は根粒菌という土壌微生物が共生します。子供たちに落花生の生態をもっと知らせる努力も必要ではありませんか。

桑田氏：おっしゃる通り、落花生は豆類なのに、地下に潜って豆が成る不思議な生態をしています。根粒菌がついて、空気中の窒素を固定して植物の栄養源として使うことができます。「Qなつつ」がデビューした時は、TV番組の「青空レストラン」に出演させていただき、多少は落花生のPRができたと思います。最近ではジャンボ落花生「おおまざりネオ」も開発していて、今後も新品種の開発などの研究成果を通じて色々な方に落花生を知っていただければ幸いです。



（写真2）落花生の写真

ホームカミングデー 2023 報告

戸定会副会長 賀来 宏和 (造昭52)

新型コロナウイルスの大流行が終息を見せる中、2022年度に引き続き、昨年11月も無事に戸定祭が行われましたが、その4日、5日の両日に亘って戸定会と園芸学部共同企画による「ホームカミングデー 2023」が開催されました。

「ホームカミングデー」は卒業生に來校いただくとともに、卒業生同士や在校生との交流を深め、また、地域の皆様に卒業生の社会での活動などをお伝える催しです。

11月4日は、主として在校生等を対象に、「自分のやりたい仕事・今の仕事・続ける仕事」をテーマに、オンライン併用の「ハイブリッドシンポジウム」を実施しました。卒業後10年以内の卒業生の男女5名にそれぞれの仕事ややりがいなどについてお話をいただきました。

(詳細はP32)

11月5日は、主として戸定祭に來場される市民などを対象に、3つのプログラムによる「戸定ガーデンカレッジ2023」を実施しました。

プログラム1は、私が近年上梓した著作を元に、「俳人小林一茶と江戸の園芸文化～菊を中心として」と題して、松戸とも縁のある江戸後期の俳人小林一茶とその句に表れたわが国の園芸文化について話をさせていただきました。



プログラム2は、近年、人々の中でも特に関心の高い、食品と健康という分野で、二人の若い世代の女性研究者にお話をいただきました。一人は現在、地独)東京都立産業技術研究センター食品技術センターでご活躍中の岸野恵理子さん(化平6・化専平8)で、「ご存知ですか? “トクホ・機能性表示食品”」と題してお話をいただきました。もう一人は現在、千葉大学医学部府先進予防医学共同専攻予防医学センター博士後期課程に在籍中の原 千里さん(院園前令3)で、「腸内環境から考える、予防医学と栄養」と題してお話をいただきました。

プログラム3は、日本ハンギングバスケット協会名誉会長で前理事長の武内嘉一郎さん(園昭51)に「ハンギングバスケットなどで暮らしを楽しむ!」と題して、実物のハンギングバスケットによる花の装飾を見せていただきながら、その楽しみ方のお話をいただきました。

いずれのプログラムも園芸学部の大学祭にふさわしい市民向けのプログラムとしてとても好評でしたので、2024年も期待されることです。

ホームカミングデー 2024 開催について

今年も「ホームカミングデー 2024」を開催します。

今年は日程と会場が一部変更になりましたのでご注意ください。

皆様のご参加をお待ちしております!

日程変更: 10月26(土)~27(日)

ハイブリッドシンポジウム

日時: 10月26日(土) 13時30分~16時

場所: 園芸学部 E棟 2階 合同講義室

テーマ: 「自分のやりたい仕事・今の仕事・続ける仕事」

大学生(大学院生)の就職支援を目的とし、卒業後のキャリアパスについて考える機会を提供します。卒業後10年程度の4名の卒業生に話題提供いただき、最後に学生と卒業生双方のコミュニケーションを図るため「交流会」も企画します。

ガーデンカレッジ

日時: 10月27日(日) 10時~15時

場所: 園芸学部 100周年記念 戸定ヶ丘ホール

園芸学部卒業生による卒業生・市民向けの講演会です。

●プログラム1 10:30~12:00

演題: 「里山里海と生物多様性の景相生態: その保全再生の取り組みをふりかえる」

講師: 中村 俊彦(環緑昭53卒・元千葉県立中央博物館副館長・東京大学大学院農学特定支援員・放送大学客員教授)

内容: 都市緑地の蘚苔類フロラから富士山の森林遷移の研究、

そして生物多様性の宝庫である里山里海の保全再生の経験等、人・自然・文化の調和・共存を目指す景相生態学探究のふりかえりをお伝えしたいとおもいます。



●プログラム2 13:30~15:00

演題: 「踊る園芸家の花と野菜のよもやま話 ~育てる基礎から多品種の紹介~」

講師: 片山 陽介(園昭平13卒・植物自由区主宰、踊る園芸家)

内容: 花や野菜の風変わりな品種を見つけるには世界中から種子を取り寄せ、少量多品種で育ててきた踊る園芸家が、育てる基礎やその過程での面白いよもやま話を、「園芸はエンターテインメント」というキーワードで読み解く90分!



詳細は戸定会ホームページでご確認ください。戸定会ホームページ <https://dousoukai.site/tojokai/>

農林水産省・農林水産政策研究所との連携研究スキームによる 「都市・都市近郊における持続的で多様な農業の役割に関する研究」の実施について

食料資源経済学科 教授 吉田 行郷

2023年度に、千葉大学園芸学部を中心とした5大学・2研究機関から構成される研究コンソーシアムが立ち上げられ、重要性が増している都市や都市近郊における持続的で多様な農業の役割について、理念的・定量的に整理し、今後必要な施策を解明するための「都市・都市近郊における持続的で多様な農業の役割に関する研究」を開始しています。

この研究プロジェクトでは、都市農業が担っている体験農園による都市住民の健康増進、日本型CSAによる地産地消拡大効果、都市型農業公園による災害対応等の多面的機能に着目して、それぞれの効果的な発揮に向けた対応方向を解明することを目指しています。千葉大学園芸学部から参加している吉田行郷（食料資源経済学）、齋藤雪彦（緑地環境学）、岩崎寛（緑地環境学）、櫻井清一（食料資源経済学）、丸山敦史（食料資源経済学）、加藤弘祐（食料資源経済学）、野田勝二（緑地環境学）の7名は、このうち、体験農園等による食と農が持つ癒し機能の効果的な発揮に関する研究を主に担当しており、都市や都市近郊にある体験農園及びその関連施設における障害者やひきこもり等も含めた都市住民に対する癒し機能を把握し、その効果的な発揮のために必要な対応策や体制の整備について明らかにする研究を開始しています。

体験農園に関する研究は、具体的には以下の3つの研究テーマについて、7名が分担しながら、連携しつつ研究を進めて

います。

- 1) 体験農園による癒し機能、QOL向上機能の解明に関する研究（担当：岩崎、櫻井、丸山、加藤）
- 2) 体験農園の持続性や官民の役割分担、地域貢献に関する研究（担当：吉田、齋藤）
- 3) ユニバーサル農園の形成過程に関する実証的研究（担当：吉田、野田）

これらの研究成果の一部は、既に共に2024年6月に開催された日本認知症ケア学会大会シンポジウムと日本フードシステム学会大会シンポジウムとで発表されており、今後の研究に拍車がかかることが期待されています。



松戸市小金わくわく農園の様子（筆者撮影）

「もっとも身近でおきてる進化の発見」

園芸学科 准教授 深野 祐也

都市の道路の隙間に生えている植物は、夏場には50度以上になる灼熱の地面という過酷な環境で生きています。そんな都市の植物の代表に、カタバミという植物があります。私たちの研究によって、カタバミの葉の色が都市のヒートアイランドによって急速に適応進化していることが分かってきました。

カタバミは葉の色に種内の変異があり、緑だけでなく赤いものまで、ばらつきがあります（写真）。特に赤い個体はアカカタバミと名付けられています。緑葉と赤葉の個体は交配できますし、赤～緑の中間もたくさんあります。ただし、モミジの紅葉などと違って、葉の色は生まれたときからあまり変化しません。葉の色は多くは遺伝的な性質です。

私たちは、赤葉の個体は都市部の道路脇などに多いけれど、農地や芝生など緑が多い場所には生えていないことに気が付きました。東京近辺の数十地点で調査すると、都市部と緑地で葉の色がはっきり分かれていました。実験室や温室で行った様々な実験で、その理由が分かりました。25℃くらいの適温では赤葉よりも緑葉の個体の方が、光合成効率が高くよく成長できるのに対して、35℃以上の高温環境では、緑葉よりも赤葉の個体の方がよく成長できることが分かりました。葉に含まれる赤い物質（アントシアニン）のおかげで高温に強くなっているようです。アスファルトやコンクリートの隙間に生える都市のカタバミはヒートアイランドによって高温ス

トレスを受けています。この高温が、赤葉の進化を促したのです。

さらに、この進化の普遍性を検証しました。もし都市の高温ストレスがカタバミを赤く進化させるなら、世界中の都市でも観察できるはずです。この予測を、世界中の人が利用する生物観察アプリ（iNaturalist）のデータで検証しました。世界中で撮影された9,561枚のカタバミの写真を分析すると、予測通り、世界中で都市部のカタバミは赤葉が多いことが分かりました。世界中の都市でヒートアイランドが起きていて、世界中の都市で赤い葉が進化しているのです。みなさんもアスファルトの隙間や公園に生えているカタバミの葉色を観察しながら、進化を実感してみたいはいかがでしょうか。



「卒業生から、就職活動や仕事内容など生の声を聞きました!」

戸定会会長 齋藤 京子 (園昭51)

ホームカミングデー 2023 シンポジウムを戸定祭に合わせ、11月4日(土) 13:30～15:30 戸定ヶ丘ホール及びオンラインを開催しました。テーマは、「自分のやりたい仕事・今の仕事・続ける仕事」卒業・修了後10年未満の5名の方から、それぞれ話題提供をしてもらいました。

津村 利明さん 食経平27 東京青果(株)
加藤 彩織さん 食経平30 三菱商事ライフサイエンス(株)
星加 紘生さん 応生平30 院園前令2
ライオンハイジーン(株)
阿部 祐希さん 緑環令2 NTT都市開発(株)
三橋 勇太さん 園令4 船橋市役所

園芸学部は、学科が異なると就職先も多岐にわたっています。就職活動の体験も語ってくれました。そして自ら選んだ就職先で、皆さんいずれも今の仕事に一生懸命取り組んでいました。「在校生へのメッセージ」としては、『職業

選択という人生の岐路で正解はない。ただ何もしなかった後悔だけはしないように』、『限られた大学生活を有意義に過ごしていろいろな経験を積んでほしい』、『仕事は時には苦しいこともあります。だから仕事に何か特別な意味を持っていくと良い』、『迷った時は、自分を飾らずありのままの自分に向き合うことが大切』など、先輩から在校生に向けた経験に基づくメッセージがありました。また、皆さん、大学生活では、学業だけでなく海外留学、サークル活動、アルバイト、旅行等思いっきり楽しんでいたそうです。在校生活にとって身近な卒業生のありのままの話が聞ける貴重なシンポジウムになりました。戸定会としては、これからも就職支援に取り組んでいきたいと思っています。



会場の様子

戸定会より寄付のお願い

戸定会の重要な活動資源として一口1,000円から寄付金をお願いします。寄付は同封の郵便振込用紙でお願いいたします。

次年度の会報にて、寄付者名簿を掲載させていただきます。

なお、20,000円以上のご寄付をいただいた方には、お礼の品を贈呈します。

①～③からお選びください。

①



ジャム、ハチミツ、コーヒーセット
環境健康フィールド科学センターで収穫された果実のジャムと千葉大産純粋ハチミツ及びパナマ千葉大コーヒーのセット

②



リンゴ
環境健康フィールド科学センター沼田農場産のリンゴ ふじ (12月中旬以降発送予定*数量限定のためリンゴの返礼品は11月末締切)

③



お酒

守屋千葉大学名誉教授(横綱審議委員会元委員長)のご実家守屋酒造の純米大吟醸と辛口純米酒のセット(オリジナルラベル)

編集後記

園芸学校草創期に教鞭をとられていた牧野富太郎博士、松戸市制80周年と興味深い特集があり、支部総会も各地で開催されて支部だよりのページも増えました。戸定会会報を手にとっていただき、園芸学部に思いを馳せていただければと思います。

(佐藤 菜穂子：園昭53)

今号の「学生の声」のテーマは、「卒業後はどんな仕事に就きたいか」です。「都市と自然が共生する社会の実現に寄与したい」「多くの人々が緑を通じて日常が快適になる空間をつくりたい」etc. 目先の職業ではなく、学んだことを活かして社会に貢献したい、という意欲溢れるコメントを見て、初心に返って私も頑張ろうと元気を貰いました。皆様も会報を通じ、後輩たちを引き続き温かく見守っていただければ幸いです。

(竹内 智子)

今回、「学生の声」では、「卒業後はどんな仕事(職業)に就きたいか」について執筆を依頼しました。原稿を拝見したところ、学部・大学院にかかわらず、大学で学んでいることを踏まえてしっかりと

将来のことを考えていることがわかり嬉しく思いました。在校生と卒業生の様子を互いに知ることができる貴重なツールとして、今後もこのような情報を会員の皆さまにお届けできれば幸いです。

(矢野 佑樹)

今年の「学生の声」は、卒業・修了後にどのような職につきたいか、について原稿を募りました。希望した職につける人も、つけない人も、希望した職についたけれども転職した人も、色々見してきました。実際に社会に出てみないとわからないことは多いと思います。会員の皆様、学生へのご支援を引き続きどうぞよろしくお願い致します。

(佐々 英徳)

戸定会報誌をお読み頂きありがとうございます。今号は素敵な植物画とともに園芸学部(の前身)で植物分類学を教えていた牧野富太郎の特集が組まれました。今も園芸部に伝わる牧野博士の植物に対する情熱や愛着が感じ取れる内容となっております。

(相馬 亜希子)

表紙図：牧野富太郎自筆のノジギクの説明図。日本園藝雑誌23号(1891)より写す。

編集兼発行者 千葉大学園芸学部戸定会

〒271-8510 千葉県松戸市松戸648番地 FAX・TEL 047-360-3662

印刷所 株式会社サラト

執務日：月・木・金 留守番電話にはお名前・連絡先のお電話番号をお願いします
E-mail: tojoukai@k6.dion.ne.jp